

---

# IS 転生して貰ったのは！？

マーシー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS 転生して貰ったのは！？

### 【Nコード】

N8610Y

### 【作者名】

マーシィー

### 【あらすじ】

二次創作が大好きな青年がISの世界に転生！？おまけで貰ったのは青年が大好きだった二次創作に出てくるオリIS。これで原作介入だ！……そんな風に考えていた時代がありました。ISチートは隠すもの の派生作品として書いて見ました。

## その1 (前書き)

元々は息抜きで書いていたのを連載して見ただけなので一話一話は短いです。

## その1

初めまして。俺の名前は一二三ひふみ 四五六しじゆだ。

俺の事を簡単に説明すると転生者と言う奴だ。俺は死ぬ前は二次創作が大好きで暇さえあれば色んな二次創作を読み漁っていた。

その中でIS<インフィニット・ストラトス>と言うラノベを題材にした小説が大好きだった。俺はいつもISを題材にした小説を読みながら、俺だったらこうする、此処はこういう行動で、俺の専用機は、などと妄想ばかりしていた。

中でもIS チートは隠すもの に出てきた「八卦龍」と言うオリISが大好きだった。

元はゼオライマーと言うアニメが某ロボットシミュレーションに出てきた時、そのゲームのためだけに書き降ろされ、出てきた機体をこの作品の作者が弄って作り出した機体であり、そんな機体に俺は心を引かれた。

いつも俺は妄想の中でこの機体を使ってISの世界で活躍するところを考えていた。そんな事を常日ごろから考えていて、つい考え事、いや妄想に浸っていたら俺は死んだ。交通事故で。

何のことは無い妄想に集中していたせいで信号が点滅していたにも関わらず歩道に出てしまい近くの工事現場に向かっていたロードローラーに轢かれてしまった。

なんていう間抜け。自分でもコレは無いと思った。

だが、俺は死んで意識を失ったはずなのに気が付くと赤ん坊になっていた。その時、俺が思った事は混乱したり訳が分からなくなつたのではなく、ただ

(テンプレキター)

と思っていた俺はダメ人間だつたと思う。

さて、そんな風にテンプレなのかそれともそれ以外なのかは知らないが俺は赤ん坊からやり直し体を自由に動かせる用になつた頃、俺の玩具箱(両親が与えてくれた)の中に”八つの球体”が着いたアクセサリーが入っているのに気が付いた。

俺がコレを手を取つた時、頭の中にある知識が流れ込んできた。

それは紛れも無くISの知識であり、そして俺が大好きだつた「八卦龍」の知識だつた。

俺はこの「八卦龍」を手に入れたという事実には驚愕し、次に感動しているかどうか分からない神様に感謝した。俺が大好きだつた「八卦龍」をくれてありがとうございます、と。

そして、この「八卦龍」を手に入れたことによつて、この世界がISの世界であることに気が付き、前世から思っていた原作介入をすると決めて、原作ヒロインを彼女にするぞ、と意気込んだ。

……そんな時代がありました。

俺は「八卦龍」を手に入れた事とテンプレ的な転生をした事によってある事を忘れていた。

「八卦龍」は元となった小説内で世界経済を牛耳っていると言っても過言ではない「世界電脳」が総力を挙げて作り出した機体であり、その技術力は小説内では世界一位であり篠ノ之束博士をも上回る技術力が使われた機体で有る、という事を。

つまり何が言いたいかと言うと、この「八卦龍」

整備、補給、その他もろもろが出来ない、と言う事だ。

しかも、この「八卦龍」を手に入れた時、世界ではまだISは発表されていないので俺がISを持っている事自体がおかしい事であり、しかも「八卦龍」に使われている技術はどれをとっても原作内の技術力を上回っているので、下手にこれが世界にばれたりしたら、冗談抜きで世界中から、狙われる事になる。

テンプレで転生してオリISも手に入れて原作介入だ！！と思ったら、ばれたら命を狙われかねない状況だった。

どうしよう(笑)



## その2

皆さんこんにちは。オリ主の四五六です。

Q さて、今俺がいる場所は何所でしよう？

A IS学園内1年1組

そう、原作主人公、織斑一夏がいる1年1組の教室内です。なぜ、俺が此処にいるかと言うと、ええ。そうです。俺がISに乗れるという事がばれました。

理由としては簡単な事で、一夏がISに乗れる、という事が発覚してから世界中の国で男性を対象とした適性検査が行なわれたからです。で、それに見事引っかかったのが俺、と言う事だ。

事前に対応しておけばよかつたんじゃないか？と思う人も居るかもしれない。

だが、考えて見てくれ。

俺が手にした物は「八卦龍」"だけ"である。

IS関係の知識や技術なんていうものはないのである。つまりはISに乗れる事を隠す方法を知らないという事で……

あ、でも「八卦龍」自体は乗りこなせるだけの技量は有ったみたいで、今ではキノ以上に扱える自信があるぜ！！でもGZ様に乗ったキノには勝てる気がしないがな！！

さてそんな風に考え事をしていたら原作であった織斑姉弟のやり取りが終わり、俺の自己紹介になった。

「はじめまして。漢数字で一三四五六と書いてひふみしごろ、と言います。好きな事は一人でいること、音楽を聴くこと、嫌いな事は、不特定大多数の人が居る場所にいること、勝手に物事を進める人です。ISになぜか適正があり、この学園につれて来られました。ISの”知識”に関しては何も知らない素人なのでいろいろ足を引っ張ると思いますが、よろしくお願いします」

そつい言つて頭を下げ席に戻る。クラスの反応はまあ、ぼちぼちと言つたところだ。

ちなみに俺の見た目だが、銀髪に赤と青のオッドアイで顔つきもかなり整っている。下手なモデルよりかはかなりカッコいいと言つてもいいぐらいだが、正直いらないます。

こんな中二病な姿で名前は漢数字オンリーって似合わないにも程があるだろう。

なので、学校に来る前から髪は黒に染め黒のカラーコンタクトをつけ、地味な黒ぶちメガネをかけて地味な格好をしています。

おかげでクラスの女子の殆どは一夏に興味がいっている様で何よりだ。

俺は確かに前世とこの世界に生まれた直後はハーレムだの原作ヒロインを恋人にだの思っていたが、それはあくまでもそういう風に考えている事自体が楽しかったのであり実際に目の前にヒロイン達

がいたら、恐縮して何も出来はしないのだ。

チキンだのヘタレだの大いに結構！！

俺は物語を脇から見ている傍観者になりたいのだ！！

まあ、「八卦龍」の事がばれて命を狙われたくないって事も有る  
がな！！

### その3 (前書き)

この作品のヒロイン登場!?

### その3

自己紹介が終わり、授業が終わり、休み時間となった。

一夏は早速、俺の所に来ようとした所を篠ノ之箒と呼ばれ、廊下に出て行ってしまった。つまり教室には俺一人になると言うわけで。

正直、キツイです。いろんな意味で。

今の俺は地味な格好をしているせいで余計にキツイです。何がって、周りの囁きが。

「あの人？二人目の男性適合者って」

「……なんか地味だね」

「織斑くんはかっこよかったのにな」

そんな感じの囁きが周りから聞こえてくる。

耐えろ、耐えるんだ俺。此処でこの囁きに負けて変装を解いてしまったら、大変な事になる。地味でいいんだ。地味で。このまま俺は地味に過ごしていくんだ。厄介事は一夏がきつと何とかしてくれはらずだ。

そんな風に心の中で葛藤していたら、やってきました。厄介事が。

「ちょっと、よろしくて？」

チヨロコット、もといオルコット嬢が。

「なんですか、えつと……チヨロコット?さん」

「だ、だれですかチヨロコットって。セシリア・オルコットですわ  
オ・ル・コ・ツ・ト」

「そうでした。すみません。オルコットさん……で、何か用ですか  
?」

「全く、コレだから男と言う物は……ハッ、コホン。用と言うのは  
……」

キーンコーンカーンコーン

「「あ」

用件を言おうとした時に授業開始の鐘がなる。

「こ、今回はコレまでにして差し上げます」

そういつてそそくさと席に戻るオルコットさん。

(なんとという小物臭w)

そして授業が始まる。その後はまあ原作と同じ様な展開で終った。  
オルコットさんは先ほどの事で話すタイミングを見失ったようで今  
日は話しかけてこなさそうだ。

そして放課後。

「織斑君に一二三君いますか」

山田先生が俺達を探していた。

「何か用ですか、山田先生？」

「あ、一二三君。織斑君は見ませんでしたか？」

「いえ、見てません」

「そうですか。では先に一二三君に渡して置きますね」

山田先生から渡されたのはカギだった。

「……ああ。寮のカギですか」

「はい。そうですよ。一二三君のルームメイトは1年4組の子になりますから仲良くしてくださいね」

「はい」

山田先生と別れ、寮の部屋へと向かう。

「此処か」

とりあえずノックを試してみる。

「誰か、居ますか？」

「……はい」

「今日からこの部屋のルームメイトになった者ですが」

「……………どうぞ」

はて？何所かで聞いたような声だが、誰だったかな？

「では、失礼します」

そして入った部屋に居たのは

「……………誰、貴方」

メガネを掛けた青髪の少女だった。



## その4

今俺の目の前に居るこの女性。

名前を更識簪と言う。

原作では彼女は自分ひとりの手で「打鉄式式」というISを作るうとしていた人物である。彼女も原作では一夏ハーレムの一員となるようだが、まさかこんな所で原作ヒロインに会うことになるとは。しかもルームメイトって……

「あゝ山田先生に聞いてないかな？ 今日からこの部屋のルームメイトになる一二三四五六だが」

「……そういえば、そうだったかな」

「では、改めて自己紹介をしよう。俺は漢数字で一二三四五六と書いてひふみしごろって言うんだが君の名前は？」

「……更識簪」

「更識簪ね……では更識さ」苗字で呼ばないで「……では簪さん」

「なに？」

「とりあえず、これから一緒の部屋で生活する事になるのだが、いろいろ決めておこうと思うのだが。シャワーの順番とか」

「……分かった」

それからしばらくの間二人で順番とか、細かい注意点を聞いたりしたりしてその日は終わった。

え、隣に女性が居るのに寝れたのだった？

ハハハ。紳士である俺に彼女に何かするなんて事出来るわけないだろう。

……すみません。嘘つきました。本当は彼女の姉が恐くて何も出来ませんでした。

彼女の姉である更識楯無は原作キャラ内では上位の腕前を持つIS乗りである。さらに対暗部用暗部、「更識家」の当主でありその人脈や情報網はかなりのものらしい。ついでにシスコン。

そんな姉を持つ彼女に対して何かして見る。物理的、社会的に消されてしまうわ！シスコンモードでブチぎれた楯無さんを相手にしたら「八卦籠」でもきついわ。ギャグ的な意味で。

さて、次の日になり朝、まだ布団の中に居る簪さんに軽い挨拶をしてから食堂で朝食を取る。

今日のメニューは白米に鮭の塩焼き、味噌汁、おひたし、卵焼き、納豆、飲み物に牛乳をチョイスした。ちなみに食堂が空いた直後ぐらいいに入ったので周りには殆ど、と言うか俺以外に誰も居ない。

食後、一度部屋に戻り教科書類を持って教室に向かう。

簪さんはまだ寝ぼけてたのかボーっとしてた。

教室で、一人教科書を開き予習をしている俺。実際はこっそりと「八卦龍」を使いこの学園内にあるパソコン類にハッキングをかましているいろと情報を収集している。まあ、殆どを「八卦龍」に搭載されているAI、MIKUにしてもらっているけど。

そんなこんなでいろいろ足跡がつかない程度に情報を収集していたら、誰か教室に入ってきた。

「いつちばーんってあれ、一二三君、もう来てたの」

「ええ」

「来るの早いんだね」

「朝は強い方なので」

そんな風に簡単に会話をしていたら続々とクラスメイト達が来てまあ似たような反応をしていき、最後になにやら慌てた様子で、一夏と篤が入ってきて授業が始まる。

授業中も「八卦龍」による情報収集は怠らない。何時トラブルに巻き込まれ、「八卦龍」の事がばれるか分からないのだ。

それに、極々最近なのだが「八卦龍」に関してとても重大な事が判明した。正直知らなかった方がよかったことである。

この「八卦龍」正確にはISではないのだ。ISの機能を持った別の機体なのだ。

つまり、この「八卦龍」の情報の中にISと同等の性質、機能を持ち量産が可能で性別による適正が無いコアの情報も含まれているのである。

……真面目にこの「八卦龍」の情報が外に漏れでもしたら第三次世界大戦が勃発しかねん。

チートISと思っていたのが実は特大の地雷だった。

## その5 (前書き)

作者はオルコットは嫌いじゃないよ。

ただ書いてる内にこうなっちゃうんだ。

## その5

今俺の目の前では原作最初の見せ場？の切欠となるイベント、そうオルコットさんの女尊男卑発言をリアルタイムで聞いてます。

「〜としても後進的な国にいること事態、わたくしにとっては耐え難い苦痛で〜」

「イギリスだつてたいしてお国自慢ないだろ！！世界一まずい料理で何年覇者だよ！！！」

「な、何ですって！！！」

原作と同じくクラス代表を決める話が出た時、推薦が一夏にしか出なかったことに腹を立てたオルコットさんが原作通りの発言をして一夏が切れた、と。

ちなみに俺の名前は殆ど出ていません。

フッフ、このために地味な格好と地味なオーラを出して目立たないように人の視線に入らないように過ごしてきた甲斐があったものだ。今では俺の事など「そっぴいえば居たよね」程度しか認識されていないのだ。

フハハ！！これで原作キャラとの邂逅は無くなっではクラス代表を決める模擬戦はオルコット、織斑、一二三の三人で試合をしてそれで決めることにする」った……え？

「フン！無様に負けるがいいですわ！！！」

「それは「うちのセリフだ!!」

「いやいやいや」

ちよつとまてや!!

「織斑先生、どういふ事ですか。俺も模擬戦に出るって!!」

「何を言っている、貴様も推薦されただろう?」

「だからって、いくらなんでも無理があるでしょう」

一夏みために専用機を与えられるわけでもないのに代表候補生と戦えっていくらなんでも無茶すぎるだろう。「八卦籠」は使えねーんだぞ!!

「これは決定事項だ、腹を括れ」

そういつて出て行ってしまった織斑先生。ねーよ、マジねーよ。

せつかく地味に過ごしてきたのにこれはねーよ。

「四五六、そんなに落ち込むなよ。アレだけ言われたんだ、このまま黙ってられないだろ」

「織斑さんはまだ度胸がある方ですのに一二三さんは情けない事ですね」

となにやら二人が言っているが、こいつら今の自分達の立場と状

況が分かってねーのか!？」

「二人とも、今回の模擬戦がどういう状況になってるのか理解してるのか?」

「どうゆう状況ってなんだよ?ただクラス代表を決める試合だろ」

「何を仰ってるのかしら。まあ結果の見えた試合で……」

「……今回の模擬戦、下手するとイギリスと日本の関係が悪化するんだぞ」

「」「」「え?」「」「」

俺の発言に二人だけではなく、話を聞いていたクラスメイト達も声を出して不思議がる。

「ど、どういう事ですか、関係が悪化するって!!」

オルコットが息を荒げて言ってくる。

「オルコット、この模擬戦が決まる前に一夏に対してなんて言ったか覚えてるよな?」

「それがどうしたって……」

「極東の島国、野蛮な猿の国、後進的な国等々そんな発言したよな?」

「ええ、言いましたわ」



「……その発言が一夏と二人だけの時に言ったならともかく、いやそれも問題だが、そんな発言をよりにもよって授業中、しかもコレだけの人数が居るところで発言したって事は、その発言はオルコット個人の発言ではなく、イギリス代表候補生としての発言として取られても反論できないんだぞ」

「四五六、それがどうしたっていうんだよ」

「……代表候補生の発言、それはその国の発言として取られてもおかしくはないって事だ。つまりイギリスは日本の事を野蛮な猿の国で後進的な国である、と宣言した、と取られてもおかしくはないんだよ」

其処まで言っただけでオルコットは自分がどういふ発言をしたのか理解して青ざめてた。

「今の世界情勢で日本と言う国がどういふ意味を持つかわかるだろう一夏」

「それは……」

「ISを開発した人物は日本人、最強のIS乗りも日本人、ついでにIS学園の生徒も半数は日本人。こんな状態であんな発言をしたら、どうなるか一夏お前でも分かるだろう」

「……」

何もいえなくなる一夏。だが、まだ終わらない。

「コレだけでもヤバイのにまだあるんだぞ」

「まだありますの!?!」

かなり顔色が悪くなっているオルコットが叫ぶ。

「オルコット、お前が発言した言葉をぶつけた相手の名前を言ってみろ」

「相手の名前? 織斑いち……」

「分かったな? 織斑一夏。つまり世界最強のIS乗りである織斑千冬の実の弟である相手に野蛮だの猿だの言っただ。しかも一夏は世界初の男性IS適合者。そんな相手にアレだけの発言をしたんだ。どう見繕ってもイギリスと日本の関係が悪くなるのは必須。」

もう顔色が悪くなりすぎた青から白くなってきたオルコット。

「ついでに織斑千冬と織斑一夏の二人はISの生みの親篠ノ之束博士に気に入られていらいじゃないか。もし今回の事が束博士に聞かれて機嫌を損ねるようなことになったら、下手するとイギリスが保有しているISコアだけ機能停止させられるかもしれないんだ。今のご時勢、国がISを使用できない事がどういふ事になるかなんてISに関与した人間なら分かるだろう?」

其処まで言ったらオルコットはぶっ倒れた。

「ちょ、オルコットさんシッカリして!?!」

「だれか! 衛生兵! 衛生兵!?!」

教室内は阿鼻叫喚の状態になってしまった。やりすぎたか？

## その6

オルコットさんと一夏に今回の試合がどういふ事態を招くか言っ  
て見た次の日から、オルコットさんに親の仇かの要な目で睨まれて  
ます。

何故俺を睨む。

それはさておき、今は今回行なわれる試合で俺がどういふ風にす  
るかを考えなければ。

原作では一夏が一次移行するまでの間ひたすらに避けて一次移行  
した後後一步まで追い詰めるもエネルギー切れで負ける、と言っ展  
開なのだが其処にもう一人の人間が入るとなると話しは変わってく  
る。

俺に専用機を〜と言っ話は上がってきていないのでつまり量産機  
で相手をすることになるのだが、まあ八卦龍でひたすら鍛え上げた  
俺なら量産機でも専用機持ちに勝てる自信はある。あるのだが、そ  
んな事はまず出来ない。

なぜなら、そんな事したら確実に面倒な事に巻き込まれる。

IS起動回数や機動時間が優に三桁を越えているような代表候補  
生に対して公式ではIS起動回数も起動時間も二桁に届かない素人  
である俺が初の試合で余裕を持って専用機持ちの代表候補生に勝ち  
ました〜なんてできねえよ。

そんなことしたらマジでやばいよ。政府に目を付けられるし、此

処の生徒会長にも絶対目を付けられるよ。ただでさえ妹さんと一緒の部屋の時点ですでにヤバイのに……。となると負けるか引き分けにするかなんだが、引き分けもまずい気がする。だから此処はワザと負けるしかないか。しかもすぐ負けるのではなくそれなりに戦ってから負けないと今後の生活に支障がおきかねんからな。

めんどくさー！

そんな風に考えてたら昼になった。ので一夏に声を掛けられる前に教室から離脱、そしてMIKUの情報から人が少ない場所ですさと弁当を食べる。

この弁当は俺お手製の弁当である。二度目の人生はいろいろとして見たかったので料理をし始めたらしい夢中になってしまい、なかなかの腕前になった。

ちなみに同じ部屋の簪さんのも一緒に作ってある。

なぜかって？ 簪さん、食生活がかなり不摂生なんだよ。なんだよ、食堂で食事するのは数日に1、2回それ以外はカロリーメイトとビタミン剤って。女子の食事じゃないだろう。

それを見かねた俺が注意したら、「……其処まで言うなら貴方が作ってよ」等と言うから、ええ。作ってやりましたとも。栄養バランスはもちろん見た目の配色、ご飯とおかずのバランスなど考えつくしたお弁当を毎日作って渡してやりましたとも。で、簪さんも俺のお弁当は気に入ったのか今はお昼のお弁当はシツカリと食べるようになってきました。

あれ、コレって餌付けしてる？

## 裏 その1

先日から私のルームメイトになった世界で二人目の男性IS適合者である一二三四五六。

かなり珍しい苗字と名前の彼だったけど、はじめて見た感想は地味。その一言に尽きた。

始めてあつた頃は殆ど興味なんて無かった。私は“この子”を完成させる事だけを考えていたから。

それからしばらくの間私たちは殆ど会話らしい会話をせず、同じ部屋に居るだけの他人、そんな関係だった。でもある日、彼が私の食生活について質問？をしてきた。

「簪さんはいつもそんな食事してるの？」って。

その頃の私の生活は授業以外は殆ど部屋に籠り、パソコンのモニターに写る“この子”の事だけを考えていた。だから食事は殆ど携帯食糧とビタミン剤で済ませてた。食堂では数日に1、2回しか利用してなかった。

そんな風に言ったらすごく怒られた。やれ、「女の子がそんな食事では」とか「成長期に」とかクドクドと言われた。

そんな彼に私はうつとおしく感じ、「……其処まで言うなら貴方が作ってよ」と言ってみてやった。こう言えば料理も出来ないくせに私の食生活に口出しできないだろうと思っていたのだけど、次の日、私の目の前にはかわいらしい模様の布で包まれたお弁当が置いてあ

った。

そのお弁当を前に彼はどや顔で立っていた。地味だけど。

流石に実物を出されてはしょうがないと取り合えずその日はそのお弁当を持って授業に向かった。

そしてお昼の時間。私は人通りの少ない場所で彼のお弁当の中を見て驚いた。

失礼だけど彼の見た目からは想像できないほど美味しそうなお弁当だった。見た目の配色に栄養バランスの考えられたおかず。全体の量も私にぴったりの量だった。

味の方もかなり美味しくて気が付いたら綺麗に食べ終わっていた。

その日の夜、彼は何所と無くわくわくした表情で私にお弁当の感想を聞いてきた。

何か癪だったから「……まあまあ、だったよ」と言ったら、「なら美味しいって言うまで作り続けてやる」と言われ、その言葉通りに次の日から私のお弁当を彼が作ってくれるようになった。

癪だけど、彼が作るお弁当は毎回毎回美味しい物ばかりで、気が付いたら私がお昼のお弁当の中身を楽しみにしていた。

アレ？私餌付けされてる？



## その7（前書き）

この作品内ではいろいろご都合主義が発生しております。

どうか温かい目でご覧ください。

## その7

さて、今日遂にクラス代表決定の試合が行なわれる事になる。

アリーナ内は何所からか聞きつけてきた生徒で埋め尽くされていた。

「……で、一夏。お前の専用機は？」

「……まだ、来てない」

原作通り一夏の専用機はまだ来ていないようだ。つまり

「仕方が無い。一二三、先に試合をしてもらおう」

こうなる。

「……ハア。分かりました」

「四五六、がんばれ!!」

一夏が応援してくれるが、こうなったのはお前が原因の一つって分かってるのか？

ちなみに俺が使用する機体は「ラファール・リヴアイヴ」。量産機の中で最も多くの武器を使用できる事からこの機体を選んだ。

フッフ、見ているがいいセシリア・オルコット。俺が対ビット兵器用戦術を見せてやる。

「よく逃げ出さずに来ましたわね」

「……ハア。逃げるも何も出来るわけないだろう。そんな事」

「フン！これだから男と言う生き物は」

「いや時間押してるからさっさと始めない？」

「っ！！……いいですわ。なら始めましょう」

開始のブザーが鳴り響く。

「そして貴方の敗北で終わりです！！」

その言葉と同時に放たれるビーム。その行動に俺は

「ほい」

放たれたビームの斜線上にスモークグレネードを投げ込んだ。

「な！！煙幕！？」

結果。アリーナ内に灰色の煙が充満する。とは言えスモークグレネード一つでアリーナ内が煙で埋め尽くされるわけも無いので俺はさらに追加で3、4個四方に投げる。

「煙幕で目を暗ましたところで私には勝てませんわ！！」

「でも攻撃も出来ないでしょ」

「っ」

数メートル先も見えないほどの濃度となった煙の中では流石に不利と悟ったのか煙の外に離脱するオルコット。

「ハツハツハ、すぐに終わらせるんじゃないのか」

「馬鹿にして!!」

だが、煙幕の外に離脱したとは言え相手は未だに煙の中。いくら射撃が得意と言っても煙の中見えない相手に闇雲に攻撃するわけにも行かず歯がゆい思いをする。

「卑怯者!!男なら正々堂々戦わないのですか!!」

「え〜。女尊男卑思考の貴方がそんなこと言ってもねえ」

「くっ」

「それに“IS”起動回数も機動時間も三桁越すような人に起動回数、起動時間共に二桁に届かない素人に真正面から戦えとか、鬼畜過ぎるだろ」

そう。原作でも思ったがさっき言ったとおり素人が代表候補生相手に真正面から戦いを挑むとか無理がありすぎる。まあ、そんな事を言い出したらいろいろ台無しだが。

ちなみに起動回数、機動時間共に二桁に届かない〜って言うのは

本当だよ。

「八卦龍」は？

いや、アレは厳密にはISじゃないからいいんだよ。だから“IS”の起動回数、機動時間に対して嘘は言っていない。嘘はね。

（全く、男と言う生き物はこれだから嫌いなのです！！でもこの煙幕も時期に薄くなります。その時が貴方の最後に……）

「ちなみに俺のスモークグレネードは108式まであるぞ（笑）」

「へ？」

その後、オルコットは煙幕の周りをうろつきながらなにやら騒いでいたが、俺は無視して煙幕が薄くなってきたら2、3個放り投げ濃度を濃くしていった。

フフフ。これこそ対ビット用戦術、「相手が見えなければビットで攻撃できなくね？」だ！！

いかにビット兵器による全方位からの攻撃といえど相手が見えなければ攻撃できまい。まあ、俺も相手が見えないから攻撃できないけど。

地味？卑怯？フハハハ！俺の目的は時間稼ぎだ！それに勝つ  
気など無いからこれでよいのだー！ー！！！！

20分後

アリーナ内外はなんと白けた雰囲気だ。だが、  
それでいい。俺の試合がしょぼければしょぼいほど一夏の印象が強  
まり、俺に対する印象は低く薄くなっていくからな！！

「……あ。山田先生」

「ふえ、な、なんででしょう」

「スモークグレネード無くなったんで棄権します」

「え？」

その言葉と同時に試合終了のブザーがなる。

「「「ええええー！ー！！！！」」」

## その8

試合終了のブザーが鳴り、その事に呆然としているオルコットを尻目にアリーナのビット内に戻ってきたら

「まともに戦わんか!！」

との声と共に振り下ろされる出席簿。甲高い音と共にシールドエネルギーが減った。

俺が試合を始めて最初にシールドエネルギーを削ったのは織斑先生だった(笑)

「まともに戦ってボコボコにされて来いと?嫌ですよ俺、そんな事」

「だからと言ってもっとマシな戦い方があっただろう」

「……ハア。次回があったらそうします」

そこで織斑先生との話を切って一夏に聞く。

「一夏、専用機は来たのか?」

「え、ああ。四五六の試合が始まってすぐに来たけど……」

「そっか。なら一次移行も済んでるか。じゃあがんばれよ」

試合は20分もあつたんだ。原作みたいに戦いながらするよりも簡単に終わってるだろう。

「……あ」

一夏のその呟きを聞くまでそう思ってたんだけどなあ。

「……おい」

「……ごめん、一次移行出来てないです」

「俺の試合、20分近くあったよな。内容も目を離せないような内容じゃ無かったよなあ」

「はい、そうです」

「なら、何で一夏君は一次移行してないのかな？俺にわかる様に話してくれるかな」

ガクガクブルブル。そんな擬音が聞こえてくるようなほど震えながら怯える一夏。

「……ハア。もういいや。さっさと行って来い」

「……ごめん」

「なら、カツコよく勝ってこいよ。それでキャラにしてやるよ」

「……わかった。四五六、行って来る」

「おう。行って来い」



その後の試合はほぼ原作通りに進んだ。違うとすれば、一夏が負けたのではなく僅差で勝ったというところか。一夏の残ったシールドエネルギーは4だけだったからな。

その後、クラスで一夏の代表決定記念のパーティーが行なわれたが俺は最初の乾杯だけ付き合っただけでそのあとこっそりと抜け出した。

人ごみ、と言うかああいうわいわいと騒ぐのは苦手なんだよね。騒ぐなら気の知れた数人で騒ぐ方がいいからな。

抜け出して向かったのは屋上。夕日が沈み暗い夜空だったが気にしない。

さて、今回の試合で俺と一夏の印象は大体決まった。地味で卑怯で意気地が無い俺と、カツコよく正々堂々で意気地がある一夏。

どちらに人気が出るかなんて一目瞭然。これで今後も地味に過ごしていけば俺の事なんて気にするような人は少なくなっていくだろう。……これでいい。このまま地味に過ごしていく事が俺の平穩に繋がるんだきっと。

そう思っていたら屋上のせいかな突風が吹き目にゴミが入り涙が出た。取るうとして目を擦るもなかなか取れない。

「クソッ!」

そう悪態をついていたら

「……四五六君?」

簪さんが俺の名前を呼んだ。……ん？

「か、簪さん！？何で此処に！！」

「……四五六君のクラスの人に君が居なくなつたから知らないかつて聞かれたから探してたの」

「あゝ、黙つて出てきたからなあ。迷惑掛けちゃつたな」

目を擦り軽く笑う。

「……」

「？。簪さん、どうしたの」

「四五六君」

「え、な……」

名前を呼ばれたと思つたら頭を引つ張られ、簪さんの胸に抱きしめられた。

「ちょ、何して……」

「私は何も聞かない。だから泣いてもいいんだよ」

「え？」

「私は今日の試合で四五六君がどう戦つたのは知らない。でも負け

たつて事は聞いている。織斑君が勝つたつて事も」

「……………」

「でも悔しかったんだよね。織斑君は勝つたのに四五六君は勝てなかったことに……………」

そう言いさらに強く抱きしめる。

「……………私にも少しそういう気持ち、分かるから」

やさしく微笑み、頭を撫でまるで赤子をあやすようにする簪さん。

「だから、今だけは泣いてもいいんだよ」

簪さんの心臓の音が聞こえてくる。とても安らげる気持ちになれる。

が!!

勘違いだから！！その思い、勘違いだからね！？

## 裏 その2 (前書き)

本音さんと簪さんの口調が分からない。

## 裏 その2

今日、このIS学園は異様な雰囲気にもまれていた。

何故か？それは今日イギリスの代表候補生と世界に二人だけの男性IS適合者の試合が行われるからだ。

私は多少興味が引かれたが見に行く事は無かった。なぜなら、男性の片方のせいで私の“この子”の開発が途中で止まってしまったからだ。

分かつてはいる。“この子”と片方の男性、織斑一夏の専用機の開発ではどちらが優先されるかなんて。……分かつてはいるけど、納得は出来なかった。

だから、私はクラスの皆や他のクラスの生徒が見に行っている間は部屋で一人、パソコンの前で“この子”の調整をしていた。

調整をしていて気が付いたらお昼の時間になっていた。ふと部屋の机の上を見てみると其処には彼が作ったお弁当が置かれていた。

最近の私は彼のお弁当のせいでお昼になるとお腹が空くようになってしまった。……完全に餌付けされてる気がするのは気のせいじゃない気がする。

彼のお弁当を食べながら、ふと考える。

(そういえば、四五六君はどうやって戦うんだろう?)

彼に対して専用機の開発、と言う話は聞いたことはないから必然的に彼は量産機で戦うという事である。専用機持ちかつ代表候補生相手に量産機に乗った素人が勝てるはずなんかない事なんて、考えればすぐに分かることなのに彼のクラスの先生は何を考えているのかしら。

でも、今日彼が部屋から出て行くときに今日の試合の事を聞いてみたら「まあ、何とかして見るよ」って苦笑しながら言ってたから、きっと彼も勝てないことはわかってたんだと、そう思ってしまった。

でも、それは間違いだった。彼だって男の子なんだ。負けることが悔しくない、なんて事なんてあるわけが無かった。私が「あの人が勝てなくて悔しい思いをしてるみたい……」。

外が暗くなってきた頃、ノック音が聞こえてきた。こんな時間に誰？と思って開けてみると、私の幼馴染の布仏 本音が来ていた。

「どうしたの？こんな時間に」

「かんちゃん。ごころーちゃん、帰ってきてない？」

「ごころーちゃん？」

「しごころ、だからごころーちゃん」

「四五六君？まだ帰ってきてないけど、どうかしたの」

「うん。今私のクラスでおりむーの代表決定記念のパーティーしてただけごころーちゃんが居ないのに気が付いて探しにきたの」

「そうなんだ。……本音のクラス代表は織斑君に決まったんだ」

「うん！！おりむーすごくカッコよかつたんだよ！！」

裾を振り回しはしゃぎながら話し出す本音。

「最初は一次移行が出来てなくてやられっ放しだったけど一次移行が出来てからはこう、ビューンって行ってバーンって戦って、最後はギリギリだったけどセツシーに勝っちゃたんだよ！！」

「一次移行できていない状態で戦って戦闘中に一次移行したの……非常識」

一次移行も出来ていないのに戦闘を始めるって、馬鹿なのかしら？教師も見えていないで止めれば良いのに。

「なら四五六君の試合はどうだったの？」

何気なく彼の試合の事を聞いてみたたん、気まずい雰囲気を出し始める本音。

「その、ごろーちゃんは……」

言いづらいように言う本音を見て私は悟った。

「……四五六君、負けたんだ」

「……うん」



「そっか……わかった。私も探して見るね」

「ありがと、かんちゃん。私は食堂付近を見てくるから、かんちゃん屋上あたりから当たって見て」

「わかった」

そうして本音と別れ、彼を探しに行く事に。そうして屋上に出るドアのガラス越しに彼の後ろ姿が見え呼ばうと思えば瞬間彼の口から「クソッ！」という声が聞こえ、目もとをぐしぐしと拭いている姿が見えた。

拭きながらも彼の体は小刻みに震え、目もとを拭いている姿は泣くのを必死に堪えているようにしか見えなかった。

その姿を見たとき、私は思った。彼は悔しかったんだって。

たとえ専用機持ちの相手とは言え負けた事が悔しかったんだって。本音の様子からしてたぶんボロボロにされたんだと思う。それでいてもう一人の男性である織斑君がギリギリとはいえ勝った事が悔しかったんだ。

そんな彼の姿を見てしまった私は殆ど無意識の内に彼の前に出て、気が付いたらまるで小さな子供をあやすように彼を抱きしめていた。

彼が泣く事を必死で堪えている姿を見ると昔の私を見ているようで、それがとても悲しく思えて、私は彼が少しでも気が楽になるようにと、やさしく抱きしめた。

男性を自分の意思で抱きしめるのは恥ずかしかったけど、それよ

り彼が泣くのを堪えている姿を見るほうが辛かった。

……どうして辛い、って思ったのかな？

## 裏 その2（後書き）

おやく。四五六君は気にしていないのに周りの雰囲気は怪しくなってきたぞ。

以下、本音が最初に簷のところ尋ねてきたときに書いていた文章

外が暗くなってきた頃、ノック音が聞こえてきた。こんな時間に誰？と思って開けてみると、私の幼馴染の布仏 本音が来ていた。

「どうしたの？こんな時間に」

「かんちゃん。ごろーちゃん、帰ってきてない？」

「ごろーちゃん？」

「しごろ、だからごろーちゃん」

「四五六君？まだ帰ってきてないけど、どうかしたの」

「うん。今私のクラスでおりむーの代表決定記念のパーティーしてたんだけど……」

其処まで言って俯く本音。普段の彼女と違い何処か暗い雰囲気を纏っていた。

「パーティーがどうかしたの？」

「パーティーは関係ないの。ただごろーちゃん、乾杯しただけですぐに教室から出て行っちゃって……」

其処まで話してまた俯く本音。

「本音、どうしたの。さっきから何か変だよ」

「……かんちゃん!!」

「きゃ」

急に私に抱きつき頭を埋める本音。

「ど、どうした「私、私クラスが怖い!!」え？」

「ごろーちゃんだって私のクラスの生徒なのに、皆ごろーちゃんが居なくなったのに誰も気にしないんの。皆ごろーちゃんがまるで最初から居ないみたいに振舞って、ごろーちゃんを気にしないの」

「本音……」

「私嫌だよ。ごろーちゃんだって私のクラスメイトなのに皆居ないように扱うんだ!!私、私恐くてたまらないよう」

こんな感じで何か変な方向に走り出したので消した。何がしたいん

だ俺の頭は？

## その9（前書き）

前話に書いてあった没案の方が人気が高い、たど……

## その9

簪さんの胸の中、温かいナリー……って違うー!!

ど、どうする!?!このまま誤解されたままではばれた時ヤバイ、シスコンさんに殺されかねん。かと言って振りほどくわけにもいかない。内気な彼女がここまでしてくれているんだ。無理に振りほどいたら彼女を傷付けかねん。それは出来ないよ。男として。

ならば、取る方法はただ一つ!!

「四五六君?……寝ちゃったのかな」

気絶有るのみ!!

(こうしてメガネが無い四五六君って結構カッコいいかもノノ)

「ハッ!」

気が付いた時俺は自室のベッドの上で寝ていた。時計を見ると朝の4時過ぎ。どうやら気絶した後ここまで運んでくれたようだ。

(は)。にしても昨日はビックリしたな。まさか彼女があんな事してくれるなんて……)

そう思いながら静かにベットから抜け出し、部屋にあるキッチンでお弁当の準備を始める。

(原作ではそんな事出来るような人物じゃなかったような……いやいやいかなこの考えは。彼女はもう空想の人物じゃなくて実在の人物なんだから、こんな考え方は失礼だよな)

考え事に耽つていても体は勝手に動き、手際よくお弁当を二つ作っていた。

「よし、こんな所かつて何だこれ!？」

出来たのは無駄に豪勢なお弁当だった。

「……どうしよう、これ」

普段通りに朝食を済ませ、教室に向かう時簪さんは珍しくもう起きていたので、部屋から出て行くとき、「……昨日は、その、ありがとう／＼」と、とりあえず感謝の言葉を出して出て行った。

部屋のドアを閉めるとき、何か沸騰した時の音が聞こえた気がしたが気のせいだろう。

さて、教室に着きいつも通りに授業が始まりお昼になった時、即座に教室から離脱しようとしたら、「お待ちになって、一二三さん!!」と大声で呼び止められた。

振り向くと、其処には少し緊張した表情で立っているオルコットさんの姿が。

「……えっと、何か？」



「その……一三三さん、以前の失言、申し訳ありませんでした！」

そう言い深く頭を下げるオルコットさん。

「ちよ、何を……」

「これはセシリア・オルコット一人として、そしてイギリス代表候補生として正式に一三三四五六さんに謝罪を申し上げているのです」

頭を上げ目を合わせ言い放つオルコット。

「どづい事だ？」

「セシリアは昨日のパーティーが始まってから皆の前でこの前言った事に対して謝罪したんだよ」

「織斑……」

「私は一夏さんと会おうまで、その、女尊男卑の思考に染まってしまっていて男だから、そんな事だけで相手の事を見ることもせずに見下していました。でも一夏さんとの試合で私はその考え方を改めました。このような考え方では一三三さんに指摘された通り、私だけではなく祖国の品位すら落としかねる、と」

涙ぐみながら話すオルコット。

「ですから、今更かも知れませんが誠に申し訳ありませんでした」

そして再び深く頭を下げるオルコット。

「い、いや、その、頭を上げてください、オルコットさん。オルコットさんがこうして謝罪をしてくれたなら俺は気にしてませんから」

「一二三さん……ありがとうございます」

オルコットさんは周りのクラスメイトに「よかったね」とか言われながら慰められていた。

ってかここで「その謝罪、お断る!!」等と言いでましたら今後の生活に多大なる支障が出るからな。……それに“俺”は気にしていないよ。まあ、周りの人たち、特に政府とか面子が大事な人たちがこのことを知ったらどうなるかは知らないけどね。

「……そうだ！四五六、今日は一緒に食事しないか？」

「……え？」

「ほら、四五六っていつも昼になるとどっか行って、一緒に食事したことって無かったからさ」

「それは……」

「な、いいだろ」

何故かキラキラと目を輝かせながら言うてくる一夏。

「……ハア、分かった。一緒に食事しようか。」

「そっか！ならセシリアと篝も早く行こうぜ！！」

ごく普通にオルコットと篠ノ之を連れて行こうとする一夏。

「おい、織斑」

「なんだ？」

「オルコットさんと篠ノ之さんも一緒なのか？」

「ああそつだよ。飯は一緒の方が美味しいだろ？」

何言ってるんだ、と言わんばかりの表情で返事をする。

「……ハア」

「？」

何故俺がため息をついたのか解らないという表情を浮かべる織斑を引きつれ、食堂に着く4人。

「何食べよっかな」

「先に席、確保しておくぞ」

「おう、って四五六、食券は？」

「俺は弁当だよ」

「そうなのか……なら早く行くな」

そうして席を確保して、少ししたら3人が来た。

「待たせたな」

「待たせましたわね」

「すまない、遅くなった」

「気にするな」

そうして3人が来たので俺は鞆から弁当箱を取り出す。

「かなりでかいな、いつもそんなに食べてるのか？」

「いや、食材が痛みそうだったから使い込んだらこうなったただけだ」

「ふ〜ん。少し貰ってもいいか」

「良いぞ」

そうして蓋を開けたら

「なん、だと……」

「まあ」

「美味しそうだな」

三者三様で驚かれた。

「卵焼きで良いか？」

「おう！」

織斑にとりあえず卵焼きをあげる。

「もぐもぐ……すっげ、メツチャうめえ!!」

「そうか？」

「ああ、まじで美味かったよ」

「それは何より」

そうしてもぐもぐと食べていたらオルコットさんと篠ノ之さんがこちらを見ていたのでしょうがないから、から揚げと、ミニハンバーグをお裾分けした。

「えっと、よろしいので？」

「いいよ。と言うか食べ切れそうにないからどうぞ」

「すまん、ではいただく」

二人とも俺のおかずを食べた数秒後、撃沈した。

「ど、どうした。不味かったか」

「……いえ、とても美味しかったです」

「……ああ。おいしかった」

「なら、いいんだが……」

( (男性なのにここまでおいしい料理が出来るなんて……) )

なにやら二人ともへこんでいた。

さて、いろいろあったがこれにて一件落着として、明日から地味な生活に戻れると思っていたら「生徒会から呼び出しします。一年一組、一二三四五六君。一二三四五六君は至急生徒会室に来てください。繰り返します。一年一組」と呼び出された。

ごめん。簪さん。もう君にお弁当は作れないかも……

## その9 (後書き)

セリフで一人多いのは篠ノ之空気さ、  
うわ何をする、  
やめ) r z



## その10(前書き)

楯無さんの口調と性格が把握できない。

そのせいでこつなつた。

## その10

今俺の目の前でにこやかに笑っている女性、名前を更識 楯無と  
いう。

彼女は簪さんの姉であり、日本お抱えの暗部「更識家」の現当主  
である。性格は明瞭快活で文武両道、掃除に家事、料理に裁縫、更  
にはIS関係の知識も豊富で専用機を作り上げたことも。

プロポーションも女性として魅力的な体を持ち、まさに完璧超人  
といっても過言ではない、と言う原作でハイスペックを地でいく人  
だ。

ただし、シスコン。

そんな人が俺を呼び出した理由なんて、一つしかない。

「こうして実際に会うのははじめてかしら。簪ちゃんの姉の更識楯  
無よ」

「えっと、はじめまして。簪さんのルームメイトをしている一三三  
四五六です」

「私の名前も珍しい、と思ってたけど貴方のはもっと珍しいわね」

「よく言われます」

「ここまでにはこやかに話が進んでいるが、この後からが問題な気  
がする。」

「……さて、今日ここに呼び出された理由、わかるかしら？」

「……先日の試合、の事ですか」

「そうね、それも有ったわね」

「それも？」

「では先にそのことから話し始めましょうか」

「はあ……」

其処から、試合内容についてクドクド言われたが、まあ楯無さんも素人が真正面から代表候補生に戦いを挑む無謀が分かっているように大した事は言われなかった。ただ他の方法が無かったのか、と言われたぐらいだった。

「……このぐらいかしらね、生徒会長として貴方にいう事は」

「そうですね……生徒会長として？」

「そう、ここまでは生徒会長としてのお話。これから話すのは更識簪の姉として話すことよ」

其処から急に顔つきが真剣になり、場の雰囲気もかなり変わった。

「この話をする前に、この学園の警備の話をしなくてはならないの」

「？」

「この学園は世界中からIS関係の生徒や技術者が集まってくるの。そのため警備関係もかなり厳重になってるのは分かるわね」

「え、ええ」

徐に立ち上がり俺の周りを回りながら話始める。

「警備の関係上、監視カメラもこの学園中に設置してあるわ。無論  
プライベートな場所、トイレとか浴場は別だけど」

「はあ……」

「そして、監視カメラがある場所に“屋上”も含まれてるの」

「……」

この時点で俺は冷や汗が止まらなかった。

「そして昨日、たまたま私が屋上の監視カメラの映像を覗いた時……」

バキィ、そんな音を上げて彼女の手の中の扇子が砕けた。

「……ねえ、四五六君。どうして貴方、簪ちゃんに抱きしめられてるのかな」

俺の正面に立ち、俺の顔を両手で掴み顔を固定して至近距離で話す楯無さん。その目は暗く濁っており輝きも無く、一言で言っならヤンデレの目つきだった。

「あ、あれは……」

「あれは、何かな？私に分かるようにシツカリとオシエテクレルヨネ？」

この時点で俺は気を失いそうになっていた。何だこれ、何でこんな目にあってるんだ。楯無さんの手がめり込んで痛い。と言つか血が出てきてるんですけどおおー

「あれは、簪さんが俺を慰めてくれただけです」

「慰めた？」

「そ、そうです。その日の試合で俺が勝てなかったことに、その、泣きそうになった所を簪さんが抱きしめてくれただけで、他意はありません！！」

実際は目にゴミが入って涙が出ただけのを簪さんが勘違いしただけけど、こつ言っておかないとまずい気がする。

「ホントウかな？」

「ほ、本当です！！」

「……」

「……」

そのまましばらくの間見つめあう。ここで少しでも目を逸らしてもしたらきつとヤバイ。明日の日の出を見られなくなる気がする。

「……フウ、どつやら本当のようね」

「そういつて両手を離し手くれた楯無さん。」

「痛っ」

手を離してくれたのはいいのだが、手の爪がめり込んだところから軽く血が出た。

「あ、ご、ごめんなさい。今手当てするわね」

手際よく傷跡を手当てしてくれる楯無さん。

「本当にごめんなさいね、四五六君。私、簪ちゃんの事になるとどうしても制御できなくて……」

シユンとして俯く楯無さん。

「いえ、大丈夫ですよ。そんなに深い傷でもないですから。」

「そうだけど……」

先ほどのヤンデレのような雰囲気は無く、今の彼女は悪い事をし怒られるのではないかと不安になってる子供のようだった。

「フフ」

「な、なに。急に笑って」

「いえ、さっきの楯無さんと今の楯無さんのギャップが可笑しくて」

「な!?!も、もう。お姉さんをからかわないの!?!」

「ハハハ」

「わ、笑うなー!?!」

ポコポコと軽く叩いてくる楯無さん。あれ、彼女ってこんなに可愛い人物だっただけ?

「フウ、フウ……コホン。話は変わるんだけど四五六君から見た簪ちゃんってどんな子かな」

「?どういう事ですか」

「その、ね。私は簪ちゃんの事がとっても大事でとっても心配なんだけど、その、いろいろあってね。直接話す機会がなかなか無くてね」

何処か諦めたような顔つきで話す楯無さん。

「……簪さんは普段はあまり話すことはありませんけど、優しくていい子だと思いますよ」

「そう?」

「じゃなきゃ、俺みたいなのを慰めてくれませんよ」

「そうかしら?」

「そうですよ」

その後は簪さんの最近の状況を軽く話して、お開きになった。

「ごめんなさいね、こんなに引き止めちゃて。それに怪我也させちゃって」

「いえいえ。それだけ簪さんのことが心配なんだって分かりましたから」

「そう言ってくれると助かるわ」

その時の彼女の顔は妹を心配する姉、そう完璧超人などではなくただの普通の女性だった。

「簪さんとの仲、よくなると良いですね」

「ええ、そうね」

「では、失礼します」

「今日は、ごめんなさいね」

「いえ、もう気にしてませんから」

そうして、生徒会室から出て行く俺。

フウ。……生きた心地がしなかった。だってあの人ヤンデレっぽくなつてた時後ろに何か専用機っぽい物がゆらゆらと見えてたもん。



下手な回答したらきつと消されてたかも。

でも、まあこれで取り合えず危機は去ったかな。簪さんにちよっかい出さなければ何もしてこないだろうし。俺簪さんにちよっかいなんてして……して……。

俺、餌付けしてた。どうしよじ。

その10(後書き)

妹LOVEな楯無さん。

その思いは彼女から目の輝きを奪うほどである。

## その11 (前書き)

更識姉妹ルート (ただし、失敗すると二人ともヤンデレになります)

布仏姉妹ルート (ただし、キャラが把握できていないので会話が少なくなりませ)

NTRルート (寝取りルート。一夏ハーレムの誰かを寝取る。失敗すると主人公勢が敵にまわります)

孤独ルート (ヒロイン無し)

この作品がゲーム化したら作者はこうするんだ。

## その11

生徒会からの呼び出しが終わり、教室に戻り席に着く。後ろのドアからこっそりと入ってこっそりと席に着いたおかげで誰にも気づかれていない。

フッフ、地味スキルは着々と向上しているようだな。

そんな風に悦に浸っていたら、クラスの皆の話が聞こえてきた。なにやらクラス代表戦の事で盛り上がっているようだ。……という事は

「その情報、古いよ」

来ました。セカンド幼馴染こと、ちっぱい、じゃ無かった嵐 鈴音。原作では初期から登場している物のクラスが違う事で何かと不憫な目にあっている子です。

その後は織斑先生の登場で何か小物っぽいセリフと共に戻っていく彼女。今思っただけで、彼女、廊下で入るタイミング計ったから授業開始ギリギリに登場したのかな？

廊下で聞き耳を立てながら入るタイミングを計ってる代表候補生。……シニールだ。

その後いつも通りに授業が進みお昼の時間になって、すぐさま教室から離脱した俺。昨日のように一夏と一緒に食事をする気は無いのだ。それに今日、彼女が起こすイベントに巻き込まれたくないからな。

そうして来ました。俺がいつも食事している隠れ家的な場所。ここは木や校舎等で普段は暗いのだがお昼時、つまり日が一番高くなる時だけ一部分だけ日が当たる場所があり、俺はいつもそこで食事している。

そこ、寂しい奴とか言わない。こうした日々の小さな努力が後々大きな意味を出すんだ。そう思っていたら

「お先に失礼してるわよ、四五六君」

地面にシートを広げ笑顔で座っている生徒会長に姿が。

「……何故、ここに？」

「此処わね、私のお気に入りの場所なの。最近はやっと忙しくて来れなかったんだけどね」

「……さいですか」

ここでヒターンしても厄介事になるだろうと諦めて、「失礼します」と一言掛けてシートに座らせてもらう。

「ふふん。此処に目を付けるとは四五六君なかなかやるわね」

「いえいえ、たまたま見つけただけですよ」

「そっ?」

「そっですよ」

そんな会話をしながら俺はお弁当を出す。

「それ、四五六君が作ったのかしら？」

「ええ。俺の手作りですよ」

「……………」

俺の作ったお弁当の中と自分が作ったお弁当の中を見比べる楯無さん。

(何かしら、この言いようの無い敗北感は……………)

「どうかしましたか？」

「え！？何でも無いのよ、何でも」

「そうですか」

不思議に思いながらも、「いただきます」と言ってからお弁当を食べ始める俺と楯無さん。

「その卵焼きおいしそうね」

「なら、そのから揚げとなら交換しても良いですよ」

おかずの交換をしたり。

「……………悔しい、でもおいしい」

「何が？」

俺の卵焼きを食べた感想を聞いた。

「食後は紅茶よね」

「いや、緑茶でしょ」

食後の飲み物で言い争ったりしながら、お昼が過ぎていった。

「……ふう。こうしてゆっくりお昼を食べるのも久しぶりね」

「忙しそうですからね。生徒会長って」

「そうよー、忙しいのよー生徒会長って」

ぐうたれた感じになって話す楯無さん。

と言うか、楯無さんてこんな感じだったけ？人をおちよくるのが趣味の人だと思ってたんだけど。

「こうしてると普通の女の子ですね」

「だれが〜」

「楯無さんが」

「……へ？」

キョトンとした表情を浮かべる楯無さん。

「生徒会室で話したときや、今一緒にお昼を食べた時の楯無さんは普通の女の子ですね」

「な、な、な」

顔を赤くしながら驚く楯無さん。

「なに、言ってるのかしら四五六君は。私は生徒会長でIS学園最強なのよ。偉いのよ」

「そうですか？妹の事を心配したり、今みたいに一緒に食事をした限りでは楯無さんは普通の女の子じゃないですか？」

「な！！……フウ。四五六君と一緒にいると何でか調子が狂うわ」

「そうですか？」

「ええ、そうよ」

苦笑しながら、言う楯無さん。でもその顔は何処か嬉しそうだった。

「さてと、私は先に失礼させてもらうわね」

「仕事ですか」

「生徒会長は忙しいのよ。四五六君」

「忙しいのは分かりますが、程ほどにしないと体、壊しますよ」



「あら、心配してくれるの」

「当たり前ですよ、楯無さんは女の子なんですから」

「っ!?!」

“女の子” その言葉を聞いた楯無さんは何故か目を潤ませた。

「ど、どうかしましたか!?!」

「な、何でもないわ。そ、それじゃあ私は仕事があるからバイバイ」

そういつて駆け足で、走ってく楯無さん。

「何だったんだ?」

その11（後書き）

ダメだ、生徒会長のキャラがつかめない。気が付いたら普通の女の子になってるお。

前話の没案を晒して見る。

ヤンデレモードが続いた場合。

「あれは、簪さんが俺を慰めてくれただけです」

「慰めた？」

「そ、そうです。その日の試合で俺が勝てなかったことに、その、泣きそうになった所を簪さんが抱きしめてくれただけで、他意はありません!!」

実際は目にゴミが入って涙が出ただけのを簪さんが勘違いしただけだけど、こう言っておかないとまずい気がする。

「ホントウかな？」

「ほ、本当です!!」

「……」

「……」

そのまましばらくの間見つめあつ。ここで少しでも目を逸らして  
もしたらきつとヤバイ。明日の日の出を見られなくなる気がする。

「……フウ、どうやら本当のようね」

そういつて両手を離し手くれた楯無さん。

(はあ)。助かったのかな?)

「……でも、おかしいのよね」

「……え?」

「簪ちゃんが優しいと言つても同じ部屋だけの貴方が泣きそつに  
なつてたから、つてだけで抱きしめるとは思えないのだけど」

「……そ、それはつムグ!」

気が付いたときには俺は座っている椅子に縛り付けられていた。  
水によつて。

(これは!!)

「……ねえ、四五六君。本当に貴方、簪ちゃんに何もしてないの?」

「ムー、ムー」

首を振り必死に抵抗する俺。だが

「ねえ、どうして話してくれないのかな?……何かやましい事でも

あるのかな？」

再び俺の顔に両手を当ててくる楯無さん。両手の部分だけISを展開しながら。

「ねえ、どうして、どうして話してくれないの！？ねえ、なんで！」

少しづつ楯無さんの指が頭にめり込んでくる。

「どうして、どうして、貴方は簪ちゃんに抱きしめてもらってるの。何で私じゃなくて貴方が抱きしめられてるの？」

「ア、ガガガ」

「ねえ、答えてよ。答えなさいよ！！」

薄れていく意識の中、最後に見たのは輝きが無くなり濁った目つきをしながらも涙を浮かべ何処か怯えている表情を浮かべた楯無さんの顔だった。

つまり、ヤンデレモードが続いた場合、四五六君は死んでいたんだよ！！

### 裏 その3 (前書き)

ピロリン 新しい攻略ルートの条件が公開されました。

生徒会ルート 条件 更識・布仏姉妹ルートのグラフィックを100%にする事。

更識姉妹と布仏姉妹によるハーレムが展開されます。ただし4人全員の愛情度を均一に上げられなかった場合、鬱ENDになります。

誰得!?!一夏ルート 条件 NTRルートで筈、セシリア、鈴、シヤル、ラウラの順番で攻略し、BAD ENDを見る事。

誰かのヒーロー主人公になる事を諦めヒロインになる事を決意するルート。  
一週目は女装、二週目からはTSになります。

年上のお姉さんルート 条件 孤独ルートで千冬、真耶、クラリツサのみ友好度をMAXに上げる事。

精神が肉体の年齢に有っていない為、年上にしか興味が持てれなくなってしまうルート。年上のお姉さんに甘える事が出来ず。

### 裏 その3

私が彼の事を意識し始めたのは、始めて彼と話をした時かしらね。

その日、私はたまたまIS学園の防犯カメラの映像を見ていたの。これは定期的に行なっている事でその日は生徒会の仕事も、裏関係の仕事も殆ど無いという珍しい日だったのを覚えてるわ。

防犯カメラの映像と言えど、IS学園中に設置されているカメラの数は数百以上ありその全てを確認する事は出来ないの、生徒が居ない時間帯や、人っ気が無い場所などを中心として確認していたの。

その画像を見たのは本当に偶然だった。初めて見たときは自分の目を疑ったわ。……だって、あの内気で大人しい簪ちゃんが人を、しかも異性、つまり男性を抱きしめてるんだから。

しばらくの間私は呆然としていたわ。そしてその後、恥ずかしい事に物凄く嫉妬してしまったの。なんで、抱きしめられているのが私ではなくて見知らぬ誰かなのかって。

この抱きしめられている男性が四五六君だというのはすぐに分かったわ。彼が入学してくる前に顔写真を見たからすぐに分かったの。それに、簪ちゃんのルームメイトっていう事もあるからね。

私はすぐさま、彼を生徒会室に呼び出したわ。彼がどうして簪ちゃんに抱きしめられていたかを聞きだすために。ついでに先日彼が行なった試合の事についても言っておくために。

彼が生徒会室に入ってきて実際に見た感想は、地味、ただそれに限るわ。身長や顔つきは悪くは無いと思うのだけど、黒髪黒目黒縁

メガネが彼を地味にしていたわ。彼が用意していた席に着いてからまずは自己紹介をして先に先日の試合の事から話させてもらったの。私としては彼の取った行動に対して何か異論を唱えるつもりは無かったの。専用機持ちの代表候補生に対して素人が量産機で試合をしても正攻法ではまず勝つ事は不可能。故に彼が取ったスモークグレネードを使用した行動は評価してもいいと思うの。それがよかったかどうかは別として。

しばらくの間、彼に試合の事で軽く注意と云うか評価と云うかそんな事を話、その話が終った後、私は生徒会長としてではなく、更識簪の姉、更識楯無として彼と話をしたわ。いえ、あれは話と云うよりかは尋問と云った方が正しいわね。

生徒会長としての私の時はまだ自制が効くんだけど、姉としての私は自制が効かない事が多い。特に簪ちゃんの事が関わってくるとそのせいで彼に軽くとは言え、怪我を負わせてしまった時私は表情には出さなかったけど、酷く怯えたわ。もしこの事を彼が簪ちゃんに言ったりしたらどうなるかって。でも彼はそんな風な態度は取らずに逆に今の私とさっきまでの私とのギャップが可笑しいって笑うのよ。怪我をさせたのに……

最後に彼から見た簪ちゃんの影響を聞いてから彼と別れ、一人生徒会室で考えて見たわ。彼は簪ちゃんにとって害が有るかどうかって。簪ちゃんに話さず勝手に彼の事を害が有るかどうかって考えている私は酷く滑稽で、無様だったと思う。でも私は簪ちゃんと正面から向き合うだけの度胸が無い。

笑えるわよね。IS学園最強、ロシアの代表操縦者、対暗部用暗部「更識家」現当主、とご大層な肩書きを持っているのに実の妹一人と向き合えないなんてね……

次に彼と出会ったのは私が息抜きによく使っている、秘密の場所だったわ。この場所は普段は日陰で薄暗いのに、お昼時だけ一部分だけ明るくなりその場所です一人になるのが私の息抜きだったの。

この時だけは、余計な肩書きを捨てて、ただの更識楯無になれる唯一の場所だったから。

そんな場所に彼が入ってきた時は心底驚いたわ。その驚きを顔と態度に出さなかったのは本当に自分自身を褒めてあげたかつたくらいだわ。

そうして、入ってきた彼を追い出すわけにもいかず仕方が無く彼と一緒にお昼を食べる事にして、彼が取り出したお弁当の中身を見て、ショックを受けたわ。

此処でお昼を食べる時は自分でお弁当を作って持ってくる、と決めていてそのお弁当は手抜きなどしてなかったのだけど、彼のお弁当は私が作ったお弁当の数段上に行くものだと見てすぐに分かったわ。

失礼だけど地味な彼がこんなにもおいしそうなお弁当を作れるとは思っていなかったから……

そうして始めた二人だけの食事はいつもよりもおいしく感じられた。……此処ではいつも一人で弁当を食べていたのだけど、息抜きにはなるけど、それだけだったから。

彼とお弁当のおかずを交換したり、食後の飲み物口論したり、今までは考えなかった事を彼と一緒にして、とても楽しかった。普通の女の子のように振舞える事が……

私は「更識家」当主になるべくして幼い頃から厳しく育てられて



きた。それこそ周りの同年代の女の子が遊んでいる時、私は厳しい訓練をしていた。その事に対して別に不満があったわけではない。「更識家」に生まれてきた時点で私が普通の女の子として生活が出来るはずが無いと、幼い頃に自覚してしまったから。

そう、私は普通の女の子ではなく、「更識家」当主として、IS学園最強として常に人の上に立たなければいけないのだ。

なのに彼は私を普通の女の子として扱う。それが私にとって、どれだけ得がたい物なのか、そしてどれだけそうされたかったのか、まるで初めから知っていたかのように。

私は彼が怖い。このまま彼と一緒に居たら私は、「更識家」当主と言つ仮面を取られ、ただの普通の女の子になってしまうのが怖い。でも、心の何所かでそれを望んでいる私がいる。だから私は彼と会う事を止める。……止めたいのに、私の体はあの秘密の場所に向かってしまう。

なぜなら、彼と二人で話している間だけは、私は当主でもなく最強でもなく、ただの女の子で居られるから……

裏 その3 (後書き)

う、ん？会長様にフラグが立ったぞ。

四五六君は普通に過ごしているだけのはずなんだけどな。

## その12（前書き）

テテン 新規ルートが選択可能になりました

亡国機業ルート（スコール、エム、オータムの三人が攻略可能。ただし主人公勢全員が敵に回ります。）

八卦龍ルート（チート無双が出来ます。ただし原作キャラ全員が敵になります。）

このゲームはアドベンチャーパートとバトルパートを繰り返しながら進みます。

アドベンチャーパートでは選択したルートによって様々な場所に移動することが出来、移動した場所にいるヒロイン達と会話をして感情度を上げていきます。

中には特定のルートのみが登場するヒロインや特定の手順を踏まなければ登場しないヒロインがいますので探して見てください。

バトルパートでは3Dで描かれた主人公プレイヤーを操作して相手を倒していきます。

制限時間内に倒す、武装を制限された状態での戦闘など様々な条件下で戦闘が始まります。

特定の条件を満たすと隠し機体が出現しますので探して見てくださ

61

## その12

先日の生徒会長からの呼び出しの後、お昼時にちよくちよく一緒に食事をするようになった四五六です。

生徒会長、つまり楯無さんとはおかずの食べ比べや料理のレシピ交換、最近の話題で盛り上がりつつたりしてます。

はて？楯無さんってこんな感じの普通の女の子だったっけ？……まあいいか。別に厄介事を運んでくるわけでもないし。

さて、本日はIS学園最初のイベントであるクラス代表戦の当日である。この日が来るまでに一夏関係で厄介事がかなりあった。篠ノ之さんとオルコットさんの一夏争奪戦に鳳さんまで参加し苛烈な争いが行なわれていた。今でさえ苛烈なのに来月にはさらに二人増えるんだから大変だよな、一夏は。

まあ、「八卦龍」のAI、MIKUを使って監視カメラの映像を常に見れるようにして一夏達が何所にいるかを確認し、教室以外で会う事を限りなく減らしたおかげで俺は一夏関係の厄介事には殆ど関与してないけどね。

アレだけ露骨にアピールされているのにその好意に気が付かないって鈍感ってレベルじゃないよな。……まさかとは思うがBLとか安部さんみたいな性癖の持ち主じゃないよな。

一夏の事は置いておき、今日のクラス代表戦の事を考えて見る。確か原作では一夏と鳳さんの試合の終盤にアリーナのシールドをぶち破り所属不明の機体が乱入、その後一夏と鳳さんが協力してそれ

を撃破。確かそんな感じだったよな。

ま、俺には関係ないよね。原作通りなら俺が出しゃばる必要性な  
んかないし。主人公ならきつと何とかするでしょ。

この時、俺はそんな考えでいたのだが、この後思い知らされる。  
この世界は俺が知っている世界げんさくでは無いという事を。

クラス代表戦が始まった頃、俺はアリーナの外にいた。何故かつ  
て？いやね、周り全てが女性しかない場所に一人でいられるほど  
俺は度胸はないの。まあ、今の俺なら壁際にもいれば気が付かれ  
ないとは思うけど、試合を見るだけならMIKU使えば見られるか  
ら、それならばという事で一人外で観戦してます。

簪さんは今日はアリーナ内で観戦しているようです。どうやら「  
打鉄式」に使うデータをえるために観戦しに行くようです。お弁  
当は観戦しながらでも食べられるようにとサンドイッチにしておき  
ました。ついでに楯無さんにも同じお弁当を渡しておきました。

何故か？それは楯無さんもあの場所でお弁当を持参する時以外は  
食生活が不安定らしいのです。簪さんみたいに「打鉄式」の調整  
に掛かりっきりのせいで食事を疎かにするのではなくただ単に生徒  
会の仕事やIS学園生徒からの襲撃、「更識家」本家への連絡等で  
どうしてもお昼を疎かにしがちなようです。

そんな話を聞いた俺はついつい簪さんみたいに食事を疎かにしな  
い方が〜と言ってしまい楯無さんが「なら、四五六君。私のお弁当、  
作ってくれる？」って言われたので作るようになりました。

楯無さんへのお弁当は手軽にかつ手早く食べれるような物を中心  
としたお弁当を作って渡してます。

おかしいな？気が付くと簪さんに続いて楯無さんも餌付けしてるぞ。……もういいか。気にするな、俺。

さて、そんな風に俺と更識姉妹の食事情の事を考えていたら何時の間にか一夏と鳳さんの試合が始まっておりすでに終盤に差し掛かっていました。

「さて、と。原作通りならそろそろ無人機が……」

直後、アリーナの方角から大きな爆発音が聞こえてきた。

「っと、どうやら来たようだな。さてさて、どんな……は？」

アリーナ内に乱入してきた機体を見た瞬間、俺は呆けてしまった。

「な、な、なんで……」

其処に写っていたのは原作に出てきた無人機の姿ではなく、俺がよく知っている機体、いや“俺の前世”でよく知っている機体が写っていた。

「なんで風のランスターが……」

その12（後書き）

今回のお話は

四五六、楯無を餌付けする

無人機？いいえランスタアです

世界の違いを知る

の三本でお送りしました。



### その13 (前書き)

ゲーム予約特典!!

ゲーム内に登場する各ヒロインが秘密の衣装を着た等身大ポスターをプレゼント。枚数には限りがありますのでご予約はお早めに。

### その13

風のランスター。それは俺の“前世”で見たアニメに出てくる巨大ロボットの事である。こいつは背中についている一対の大型スラスターを使用した高速戦闘が得意でさらにそのスラスターを利用して竜巻を発生させて相手を攻撃する事が出来る。

アニメでは最初に出てきてアニメの主人公を追い詰める物のあつけなく倒されてしまったが、このランスターの性能がもしアニメと同じだったとしたら、一夏と鳳さんのペアではまずいかもれない。

2人とも接近戦を中心とした戦い方をするのにランスターも接近戦を得意としている。さらにランスターはスラスターを利用して強風を相手に向けて放つ事ができるのだが、これが一番厄介なのだ。

2人が戦う場所が制限の無い大空ならまだしもアリーナ内と言う限られた空間で、強風を放たれた場合乱気流の中を飛行するような事になるのだ。

さらに、ランスターの最強攻撃は強風を集めて巨大な竜巻を作り相手にぶつける事によりスタボロに引き裂くのだ。

その様な攻撃を2人が受けたら間違いなく専用機は大破。中の2人も唯ではすまない。

どうする。今はまだランスターと一夏達は互いににらみ合っているが、何時までこの状態が続くかは分からない。……まだ様子見だな。このランスターがアニメと同じ性能を持っている、と決まったわけではないからな。

こんな時、“前世”で見ていた二次創作のオリ主ならすぐさまア

リーナ内に入入して敵を倒すんだろうが、俺には出来ない。

「八卦龍」という強力な力を持っているのに、俺はあの中に入っていく事が出来ない。もし俺が「八卦龍」を持っていることがばれたら、きつと以前俺が予想していた事が実現するだろう。

頭の中でどうしてもその事がちらつき、後一步が踏み出せない。ハハッ、アレだけ原作介入だ、チート無双だって考えていたのにいざ事が起きたらしり込みしてしまう。

……俺は、主人公には成れないのか。

アリーナ内

「一夏、あんたはピットに逃げなさい」

「な、鈴何言ってるんだ！！そんな事出来るわけないだろう！？」

「うるさい！！エネルギーが少ししかない素人がいたって邪魔なだけよ」

「でも！..！」

「私は中国の代表候補生よ。あんたが逃げる時間と、応援が来るまでの時間ぐらい稼げるわよ」

そういつて一夏を逃がそうとする鈴。その時2人に相手から通信

が入った。

『残念だが、そうはさせない』

「相手からの通信!？」

『私には織斑一夏の持つISコアの奪取が命じられている』

「俺のISコアの奪取!？いったい誰に」

『貴様が知る必要は無い。なぜなら貴様はここで私に倒されるからだ!!!』

其処まで言つて相手が動き出す。

「一夏はやらせない!!!」

『邪魔だ!!!』

鈴の専用機「甲龍」から不可視の衝撃波が放たれる、が

『遅い!!我が風のランスターにその様な攻撃は届かない!!』

不可視であるはずの衝撃波をまるで見えているかのように回避し、接近してくる。

『風のランスターの攻撃、受けてみよ!!ボーンフーン!!』

両肩から強烈な風が吹き出し、鈴を襲う。

「こ、ね、ぐらいいいー」

鈴は「甲龍」を限界まで機動させギリギリで避けて見せたもの

『風のランスター、出力全開』

避けた先に最大出力で加速したランスターが待ち受けていた。

「ぎゃああああー」

「りーん!!」

最高速度での体当たりの直撃によりアリーナの壁際まで吹き飛ばされISの絶対防御が発動し、鈴は無事だったものの「甲龍」は待機状態になってしまった。

「クソ!!よくも鈴を!!」

怒りに任せ残りのエネルギーのことも忘れ、ランスターに向かう一夏。だが

『その様な単純な軌道では風は捕らえられん』

一夏の攻撃を流れるような動作でかわしていくランスター。

「当たれ、当たれー!!」

闇雲に攻撃する一夏。

『……………』

それをかわし続けるランスター。そして、元から少なかった一夏のエネルギーが切れる。

「しまっ！！」

『無様な……』

動けなくなった一夏の首を掴み、吊り上げる。

「ぐっ……はな、せ」

『織斑一夏、貴様に怨みはないが、我らが悲願を達成するため貴様のISコアを奪わせていただく』

ランスターが空いている手で一夏からISコアを奪おうとしたその時

「Jカイザー、ファイヤー！！！」

アリーナを覆っているシールドから爆音が響き、その音にランスタターが振り向いた瞬間ランスタターに衝撃が走る。

『何!?!』

衝撃で一夏を手放してしまい、地面に落下する一夏。それを受け止める謎の機体。

『何奴!?!』

一夏を受け止め悠然と佇む謎の機体。それを睨みつけるランスタター。戦いはまだ始まったばかりである。

その13（後書き）

ばれた時のリスクを考え、今の日々の事を思うと後一步が踏み出せない四五六

だが、一夏の危機を見て遂にその一步を踏み出した

次回、「現れた謎の機体、その名は!？」

君は八卦の輝きを見る



その14 (前書き)

戦闘描写はキツイ。

四五六君の戦う理由を考える。

## その14

アリーナ内外は異様な雰囲気に含まれていた。

突如としてアリーナのシールドをぶち抜き侵入してきた「風のランスター」と名乗る謎の機体。そのランスターになすすべも無く撃破される一夏と鳳。

そしてランスターは一夏のISコアの奪取を目的としているようで、力尽きた一夏からISコアを奪おうとした時、再びアリーナに衝撃が走り、その衝撃のせいでランスターの手から離れる一夏。

空中から落下する一夏を受け止めたのは、ランスターでも、鳳さんでもなく、白い装甲に赤いラインの入った全身装甲フルスキンの機体だった。

『……何物だ、貴様は』

「……………」

ランスターの間に無言で返す全身装甲フルスキンの機体。徐にその機体はランスターに背を向けて移動し始めた。

『貴様！何所へ行こうとっ』

ランスターが追撃をしようとした時、行く手を阻むように薄く発光する黄色い球体が八つ出現しランスターに攻撃を仕掛けた。

『くっ……………何だこれは』

突如出現した八つの球体はランスターを取り囲み、四方からビームによる攻撃を仕掛け始めた。

『ええい、邪魔をするな!!』

振り払おうと近づこうとしてもまるで行動を読んでいるかのごとく巧みに移動し回避し、そして攻撃を始める。そして、その間に全身装甲の機体は一夏を鳳さんが倒れているところまで運んでいた。

「っ…………お前は、いつたい？」

「…………」

一夏の問にも無言で返し、一夏を地面に降ろした後背を向けてランスターの方に向かう。

一夏は動けない体でその後ろ姿を見ていることしか出来なかった。

『貴様!!…………何故私の邪魔をする』

ランスターが声を荒げて問いたです。

「…………」

だが、その怒りに満ちた声を聞いてなお無言でいつづける。

『…………ならば貴様を倒してからISコアを頂くとしよう』

ランスターと全身装甲フルスキンの機体の戦いが始まる。

『うおおおー！！』

雄たけびを上げながら高速で移動しながらボーンフーンを放ち攻撃するランスター。それを巧みにかわし避けきらない時は球体の一つを前に出し防御させ、その間に回避し反撃と言わんばかりに他の球体からビームを放ち攻撃する。

（速い！！我が風のランスターに劣らぬ速さ。だが、負けられぬ。負けてなる物か！！）

お互いに高速で移動し攻撃し、回避し、防ぐ。だが、その均衡も崩れ始める。ランスターはボーンフーンで攻撃するがその攻撃よりも相手の八つの球体による攻撃の方が手数が多く、避け切れなかった攻撃により全身の装甲が少しずつ削り取られ段々と機動力が落ちていく。

対して相手はボーンフーンの直撃こそしない物の掠りはしているのにその装甲に傷一つ見当たらない。さらに八つの球体を使用した攻防一体の戦い方にランスターは押されていく。

『くっ……貴様は言いたい何者なんだ！？』

少しずつ削られていく装甲を見て苛立つように言い放つ。

『我々にはやり遂げなければいけない使命があるのだ！！貴様にその邪魔をする資格があるというのか！！』

其処まで聞いて初めて相手からの反応があった。

「……使命？」

『そつだ！！我が命を掛けてもやり遂げなければならぬ使命だ！』

「命を掛けて……」

『貴様には有るのか、自らの命を掛けてまで果すべき使命が！！無いのならば今すぐに其処を退け！！』

その言葉に気おされたのか戦闘中にも関わらず動きを止めてしまふ。さらに動きを止めてしまった場所が悪かった。

『その位置ではこの攻撃、避けられまい！！』

そう、動きを止めた後ろには未だ動きがとれない一夏と鳳さんが居たのだ。

「！！！」

『意思も、信念も、果すべき使命もなく戦場に出てきた己を呪うがいい！！』

両手を広げ、背中のスラスターを最大稼働させて解き放つ“風”のランスターの最大攻撃！！

『受けよ、デット・ロン・フウウーーン』

胸部に風と言う漢字が浮かび上がると同時に背中のスラスターから複数の烈風が放たれそれは一つに纏り巨大な竜巻となって相手を

襲う。

「っ！！」

「うわあ！！」

「きゃああ！！」

巨大な竜巻に飲み込まれ姿が見えなる相手を見て勝利を確信するランスター。

『……何物かは知らぬが、直撃を受けては耐えられまい』

いまだ舞い上げられた土煙によって相手がどうなったかは確認が出来ないが自身が持つ最強の攻撃が直撃したのを見て気を抜いてしまった。

だから、土煙の中から放たれる攻撃を避け切れなかった。

『が、ああああ！！』

放たれた攻撃に、直前で気が付き回避しようとしたのだが避けきれず右半身を削り取られるランスター。その削り取られた部分からは人ではなく機械部品が見え隠れしていた。

『ガガ、な、ゼ……直撃、シタハズ……』

土煙から現れたのは自身の周囲に七つの球体を浮かべ、胸の前に巨大な砲塔を構え、無傷でいる相手の姿だった。

『バ…な、無傷、ダと……』

自身が放った最強の攻撃を直撃させたはずなのに無傷でいる相手の姿に混乱するランスター。

「……俺には、意思も信念も果すべき使命も無い」

『…！なら、バ、何故邪魔ヲする…！』

「だけど、守るべき思いはある…！だからお前は此処で消え果ろ…！  
！チャージ…！」

「チャーじ、などサセぬ…！」

片方になったスラスターを起動させ相手に向かうランスター。だが

「Jカイザー、ファイヤー…！」

相手の攻撃の方が早く光に包まれるランスター。

『お、おオオおおオオ…！…！…！…！…！…！…！』

雄たけびを上げながら、光に飲み込まれながらも前進を続けるランスター。

（我が君よ、申し訳、ありませ……）

光の柱はランスターを飲み込み、アリーナのシールドを吹き飛ばし、空の雲すら突き抜けそして消えた。

「……」

誰も彼も、何も話すことが出来ない。戦いを見ていた生徒教師陣。そして一番まじかで見えていた一夏や鳳さんも……

その後、ランスターを消し飛ばした謎の機体は穴が開いたアリーナのシールドから離脱しその行方を暗ました。

搜索隊が結成されるも一切の手がかりは無く、あの機体に関する情報は一切得られなかった。

一夏と鳳さんはすぐさま医務室に運ばれて検査を受けるもお互い酷い怪我は無く、共に数日間の安静が言われただけだった。



「帝様。ランスターが倒されました」

「……コアの回収は？」

「残念ながら……」

「そ、うか……」

「……」

「……しばらくの間織斑一夏のISコアの奪取は止めにする」

「帝様!!」

「騒ぐな、ランスターが倒されたのだ。いかに他の機体に比べ完成していたとは言えやはり未完成のまま差し向けたのが間違いだったのだ」

「……」

「ならば今することは他の機体の完成度を上げるしか有るまい」

「分かりました。早急に仕上げて見せます」

「うむ」

「後ランスターを倒したあの機体の事ですが」

「あれについても情報を集めよ。ランスターを倒したあの機体……  
我らの悲願の最大の障害になるだろう」

「全力を挙げて集めます」

「うむ」

「では失礼します」

「ハウドラゴン我が鉄鋼龍の悲願、必ずや成し遂げて見せる!」

その14 (後書き)

カッコいいランスターを書いた結果がこれだよ!!

## その15(前書き)

ちよつとグロい表現が出てきます。

## その15

どうも、先日この世界で始めて「八卦龍」を使った実戦を体験した四五六です。

初めての实戦。オルコットさんとしたふざけた試合ではなく、本気での戦い。……恐かった。本当に恐かった。

MIKUKUによる戦闘補助が無かったら、「八卦龍」と言う規格外の機体じゃなかったら、きっと俺はあの時、倒されていた。いや下手をしたら死んでいたかもしれなかった。

ならなんでもあの戦いに割って入ったのか、それはあのままだったら一夏からISコアが奪われていたからだ。

一夏からISコアが奪われる。それはこの先の話の展開が分からなくなってしまうから俺はあの戦いに割って入ったんだ。

けど後から思い直したら、その考えこそこの世界で生きている人間を俺は唯のキャラクターとしてしか見ていない、という事だった。

俺はこの世界の人間はすでに小説のキャラクターではないと、実際に生きている人間だと、意識していたのに、結局心の何所かで俺は小説のキャラクターというメガネ越しに見ていた、と言う事だ。

だから、一夏からISコアが奪われたらこの先の展開が分からなくなる、と言う勝手な理由である戦いに入り込み、ランスターを倒した。

本当に、俺がこの世界を実際の物と考えていたら、俺があの戦いに入っていく理由など無い。「八卦龍」の中の情報が流れ出てしま

「つたら、本当に世界大戦の引き金になるかもしれないんだ。  
なのになのに、俺は、俺は……」

「四五六君、大丈夫？」

「ゴホッ……だ、大丈夫だよ。かんざ、ゴホッゴホッ」

「無理しないで。風邪引いてるんだから」

「……ごめん」

「どうやら風邪のせいで上手く考えられないようだ。」

風邪を引いたのはあの戦いの後、学園から離脱して海中に飛び込み結構な深さまで潜り其処から少しづつゆっくりと地面沿いによがって行きあと数十メートルのところまで「八卦龍」を解除してISSスーツで泳ぎ海面から出て誰にも見つからないようにこっそりと隠れながら移動し部屋に入り着替えて、戦いの精神面での疲労とまだ4月なのに数十メートルとは言え冷たい海水の中を泳いで移動し、その後も部屋に戻るまでぬれたままで移動したせいで精神、身体共に疲労したせいで風邪を引いたようだ。

「八卦龍」を装備したまま海面から出たら良いじゃないかと思っただけだが「八卦龍」意外とでかいから目立つんだよね。さらに学園近くでは捜索隊が飛び回っていたので装備したままでは目立つし海面から出てすぐに移動するにはISSスーツのままの方がよかつたんだよね。

「ちなみに俺のISSスーツは一夏ほぼ同じモノなので胸と越しまわ

り以外は露出してるとだよね。だから水中は寒かった。

「ごめんね、簪さん。お弁当作れなくて」

「ううん。無理しなくて良いから。だから今日はゆっくり休んで早くよくなってね」

「ありがとう……じゃあちよっと休ませて貰うね」

「おやすみ、四五六君」

風邪引いた俺に優しくしてくれる簪さん。……でもその優しさが今の俺には辛い。

「……ん、あ？」

「あら、起こしちゃったかしら」

「楯無、さん？」

ぼやけて見える視界には心配そうな顔をした楯無さんの姿が。

「四五六君が風邪を引いたって聞いたからお見舞いに来たのよ」

「それで、ゴホッゴホッ」

「ダメよ、無理しちゃ」



「すみません」

体を起こそうとしたが力が入らず倒れこむ。

「ゼリー持ってきたけど食べれる?」

「……すこしだけなら」

お見舞いの品であろう数種類のゼリーのなかから一つを取りだしてスプーンですくい口元に持ってくる。

「そう。じゃあ、あーんして?」

「……あーん」

風邪を引いていて上手く思考が回らないせいかな楯無さんの行動に素直に従う俺。

「……フフ。子供の世話をしてるみたい」

「……」

ちょっと恥ずかしくてそっぽを向く俺。

「拗ねない、拗ねない」

「……拗ねてないです」

「フフ」

そうやってゆっくりと時間を掛けてゼリーを食べ終えてからしばらくの間無言の時間が過ぎる。でもその時間は穏やかだった。

「そろそろ、私は戻るわね」

「今日は、ありがとうございました」

「ううん、いいのよ。普段のお礼よ」

「そう、ですか」

「そうよ。じゃあお大事にね」

楯無さんが部屋から出て行って一人になり、再び眠りに尽く俺。

「じじは？」

俺は気が付くと廃墟に立っていた。

「なんで、廃墟に……」

だが、この廃墟はどこかで見たような……

「……これは、は」

廃墟の中に埋もれている廃材の中に見覚えのあるものを見つける。

「これはIS学園の……まさか」

まさかと思い、あたりの廃材を見て回る。

「やっぱり、此処はIS学園……」

そう。廃墟だと思っていたのは変わり果てたIS学園だった。

「っ！！……そうだ、皆は」

その場所から走り出し、アリーナや教室があった場所を探すも何所もかしこもボロボロになっていた。そして最後に察があった場所に来て、俺は見た。見てしまった。

「あ、あああ」

其処には血まみれで倒れ、体中をズタボロに引き裂かれた簪さんの姿が……

「うわああああー………………！！！！！！！！！！」

「うわああああー……………!!!!」

ベットから跳ね起き床に転げ落ちる。

「四五六君、大丈夫!？」

俺の叫び声に起きた簪さんが俺の顔を覗き込む。その顔は俺には血まみれに見えた。

「ヒイ!!」

それに驚き、恐怖し、無様に這いつくばって部屋の隅で小さくなる俺。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……………」

顔を両手で抱え込みひたすら謝り続ける俺。

「……………四五六君」

「ごめんなさい、ごめんなさい……………」

「……………大丈夫、大丈夫だよ」

かつて屋上で抱きしめてもらったように優しく、抱きしめる簪を  
ん。

「大丈夫、此処に四五六君を傷つける人はいないから……」

「あ、うう……」

「大丈夫、私がいるから、安心して、ね？」

「ごめん、なさ……」

簪さんに抱きしめられ、それに安心したのか気を失うように眠り  
に尽く俺。

「大丈夫、大丈夫だからね、四五六君」

その15（後書き）

もうヤダ。書いてる内にだんだんと話が暗くなってくる。

このままだと四五六が簪さんに依存しそうだよ。誰得だよ、オリ主のヤンデレ化って。しかも男。

誰か俺にポジティブな発想を！！

没ネタ

ゼリーを食べ終えた後の話

「さて、四五六君どう？まだ食べれる？」

「いえ、もう良いです」

「そう……って四五六君のパジャマ、汗で湿ってるわね」

「そう、ですか？」

「そうよ……そうね。着替えましょうか」

「え？」

其処まで聞いたあと気が付いたら上着を脱がされ上半身を温かい濡れタオルで拭かれていた。

「シャワーはまだ一人じゃ無理そうだからタオルで我慢してね」

「は、い……」

「でも、私と一緒にいたら入れるかもね？」

楯無さんは冗談で言ったつもりだったのだろうが今の俺は風邪で意識が朦朧としていたのだ。つまり

「じゃあ、お願いします」

「え？」

「しゃわー、あびたいです」

「いえ、ちよつと四五六君」

「たてなしさん、おねがいします」

「え、いや、ちよつと……」

此処まで書いてこの後シャワーに入れるかどうかであたふたしてい

る楯無さんに授業から帰ってきた簪さんと鉢合わせする、そんな感じに書こうとしてそのままBADENDにしかならなくなったので止めた。



## 裏 その4

今私は風邪で寝込んでいる四五六君の看病をしています。

四五六君は先日から風邪をこじらせてしまったようで、同室の私が看病をしています。彼がベットで寝ている様子を見ながら私は、昨日の事を思い返していた。

先日行なわれたクラス代表戦は謎の機体の乱入で中止となった。私は目的としていたデータ収集が出来たからよかったから別にいいのだけど。

私が部屋に帰ってきたときには珍しく、すでに四五六君はベットの上で寝ていた。いつもならもう少し遅くまで起きているのに。

次の日、私は朝早くに目が覚めた。最近の私は四五六君が起きる時と同じぐらいに起きるようになってしまった。何故か？それは彼が作るお弁当の中身の匂いで自然と起きるようになってしまったからだ。……何かもう完全に餌付けされているのは気にしたら負けなのだろうか？

そんな風に思っていたら気が付いた。いつもならずでこの時間には四五六君が何かしら料理をしているのに今日は何も作っていない。気になって隣のベット覗いてみたら、四五六君は赤い顔をして呼吸を荒げていた。

慌てて、四五六君のおでこに手を当ててみたら通常より熱があり、風邪だと分かった。すぐに私はタオルを濡らし、彼のおでこに当てた。……こんな時にどうすれば良いか、分からない私が無性に悲し

かった。

その後四五六君の担任の先生に風邪を引いているので授業に出れないと連絡をして私も看病をするといって授業を休ませてもらった。

そんな風に連絡をしていたら四五六君が気が付いたようだ。

「ゴホツゴホツ……簪さん？」

「四五六君大丈夫？何処か辛いところはある？」

「辛いところはない、けど……あっお弁当つくらなっゴホツゴホツ」

「無理しないで。四五六君風邪引いてるんだよ」

「か、ぜ？」

「そう風邪。だから今日はゆっくりとしている事。分かった？」

そうやって私は四五六君に言い聞かせて四五六君に寝てもらった。しばらくは四五六君が寝付けるまで一緒にいて完全に寝付いたら私はそっと部屋から出た。

向かった先は医務室。そこで担当の先生に風邪を引いた四五六君の看病の仕方を聞きに行ったのだ。

何故か看病の仕方のほかに弱った時の男性の落とし方や高感度を持たれる看病のしかたを熱心に教わらされた。……べ、べつに四五六君にするわけじゃないんだからね。

部屋に戻ってきたとき、四五六君のベットの隣にゼリーの詰め合

わせが置いてあった。どうやら私がない間に誰かがお見舞いに来たようだ。誰が来たんだろう？本音かな。

そしてしばらくのあいだ私は彼が寝ている横で先日のクラス代表戦で得たデータとあの謎の機体のデータを見ながら“この子”に使えるデータは無いかと調べていたら、四五六君の呻き声が聞こえてきた。

振り向き、四五六君を見たとき四五六君は顔中に玉のような汗をかき、何かに怯えるような顔で唸っていた。そして

「うわああああー……………!!!!!!」

恐怖で怯えたような悲鳴を上げてベットから跳ね起きた。

私は慌てて「四五六君、大丈夫!?」と駆け寄り顔を覗き込んだら、四五六君は顔をすくませ私から逃げるように部屋の隅までいつてそこで両手で頭を抱えこみ小さい声でひたすらに「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい………」と繰り返した。

そんな姿を見た私は何時の日かしたように四五六君を抱きしめた。

「……………四五六君」

「ごめんなさい、ごめんなさい………」

「……………大丈夫、大丈夫だよ。此処に四五六君を傷つける人はいないから……………」

「あ、うう……………」

「大丈夫、私がいるから、安心して、ね？」

「ごめん、なさ……」

「大丈夫、大丈夫だからね、四五六君」

四五六君が落ち着けるように優しく静かに語りかけるように話しかけたおかげか四五六君は気を失うように再び眠りに着いた。

彼がどんな夢を見たのかは分からない。でもアレだけ取り乱すほどの夢のことだ。私には想像がつかないほどの怖い夢だったのだろう。

四五六君が再び悪夢にうなされないように私は優しく、けれども力強く抱きしめた。

抱きしめた後、四五六君が手を離してくれなくて仕方がないから私のベットに運んでその日は一緒に寝る事にした。

……こゝ、これは四五六君の為にしたのであって、ぐゝぐつにやましい事じゃないんだから!!

## 裏 その4 (後書き)

最後が書きたくてやった。後悔も反省もしない。ただもつと甘くできなかつた事が悔やまれる。

裏 その4の続き(前書き)

練乳、シロップ、蜂蜜、黒糖等など甘い物をかけて見た。でも甘くならない気がするのは作者の舌がへボーせいさいのうか？

大事な事や秘密にしておきたいことほどちょっとしたことではれる物です。

## 裏 その4の続き

更識簀、私はこれまでの人生の中で一番緊張しています。

何故か？それは今私のベットのルームメイトである四五六君と一緒に寝ているからです！！

何故こうなったかと言うと、四五六君が悪夢に魘されそれにより叫び声を上げながら跳ね起きそのまま部屋の隅で震えながら謝罪の言葉を繰り返したのを見て私は四五六君を優しく抱きしめて落ち着かせたのです。

そうしたら、安心したのか気を失うように再び眠りに着く四五六君。其処まではよかったのだけれどその後が問題だった。

四五六君、手を離してくれないの。

ガツチリと私の服を掴んで離さない四五六君。さっきの事を思うと振り払うのも気が引け、しょうがなく私は四五六君を私のベットまで運び、一緒に寝る事にしたの。

……これが間違いだった。

最初は、別によかったの。さっきの魘されようが嘘のように安心しきった表情で寝ている四五六君の顔を見て何処か嬉しい気持ちがありましたから。

(フフ。こうして見ると子供みたい。それにこうやって安心しきった表情の四五六君って可愛いな。男の子なのに……男の子?)



私が四五六君が男の子という事を思い出した瞬間、私の顔は一瞬にして真っ赤になった。

(え……：ちよつと待って、え？私、自分から男の子をベットに入れたの！？)

そう考えてさらに顔が赤くなる私。

(う、ううん。大丈夫。これはしょうがない事。だって四五六君が手を離してくれないからっ…ひゃう)

自分が取った行動に対して納得させようとしていたら四五六君が抱きついてきた。しかも私の胸にか、顔を押し付けてきた！！

(?!\$&\*!!!!)

声にならない悲鳴を上げる私。さらに四五六君は顔を押し付けた状態で匂いをかぐように大きく呼吸を始めた。

(え、な、何してるの四五六君！？私まだ今日はシャワー浴びてないのに!!)

もはやパニック状態に陥る私。そんな私の心情なんてお構いなしにさらに呼吸を続ける四五六君。その表情は安心しきった表情だった。

(……へう)

パニック状態が続いたせいで私の頭は処理落ちして気を失った。

「……………はっ」

気が付いたとき、日は暮れていてすでに夜だった。

「……………もう、こんな時間なんだ。そうだ四五六君は？」

四五六君は私の隣で穏やかな表情で寝ていた。私の手を握って。

「フフ。やっぱり子供みたい」

そう思うとさっきの行動は小さな子供が母親に抱きつくような行動だったのかな？

「……………汗、かいちゃったな。シャワー浴びよ」

握っている手をゆっくりと離し、シャワーを浴びに行く。手を離れた時、ちよっと四五六君が嫌そうな顔をしたけど我慢してもらおう。……………汗臭いままは嫌だから。

「……………フウ。私ってそんなに匂うかな？」

着替える前に四五六君の行動を思い出してしまい、なんとなく服の匂いをかいでしまった。

「……あ、四五六君起きたの？」

「簪さん、おはようです」

「どう、まだ熱っぽい？」

「いえ、だいぶよくなりました」

「そっか。よかった」

「……その、ですね」

「ん？なにかな」

何かとても気まずい表情をする四五六君。

「……どうして俺は簪さんのベットで寝てるのかな？」

「……覚えてない？」

「あいにく……」

どうやらあの事は覚えていないようだ。私と一緒に寝たって言うのは恥ずかしいから、誤魔化して置こう。

「四五六君、私が食堂でご飯を食べている時にたぶんトイレに行つてその後私のベットと間違えたんじゃないかな？」

「……それは、失礼しました」

深々と頭を下げる四五六君。

「うん。気にしてないから。風邪引いてたんだからしょうがない  
よ」

「でも……」

「悪いと思ってるなら早く風邪を治す事。いい？」

「はい」

そんな姿を見て怒られて落ち込む子供見たいと思った事は秘密だ。

「……そのシャワー浴びたいんだけどいいかな」

「いいよ。私はもう入ったから。でも大丈夫？」

「うん。だいぶよくなったから。それに汗を流すだけだからすぐ出るよ」

着替えを持って浴室に行く四五六君。……その間にシーツ変えておじつ。

「ふう、さっぱりした」

「そう。よか、った……」

浴槽から出てきた四五六君を見て言葉が止まる私。

「どっしたの、簪さん？」

首を傾げる四五六君の目は“赤と青”の瞳になっていた……

裏 その4の続き(後書き)

配置が逆? いいんだよ。男があたふたするより女の子があたふたする方が良さだろう。

お見舞い・更識姉妹ルート編・その一

「四五六君調子はどうかな」

日が暮れ仕事に目処が立った楯無。なのでふたたび四五六の調子を見に行く事に。

「……返事が無いって事は寝てるのかな」

ドアをノックし、声をかけてみたが反応は無し。

「でも、四五六君は風邪引いてるし……」

普段ならそこでとりあえず一度引くのだが四五六が風邪を引いているという事が気に掛かる。

「……はいっちゃんおうか」

後ろめたい気持ちを抑え進入した室内で見たものは……

「……か、んちゃん?」

「ね、姉さん……」

其処で見たものは簪がベットの途中で四五六を抱きしめていると  
だった。

「……」

「……」

お互い無言になる。

「……酷い、かんちゃん酷い。抜け駆けしないって言ったのに」  
ぼろぼろと涙をこぼし泣き始める楯無。

「ちが、姉さんこれは……」

慌てて誤解を解こうとしたが

「かんちゃんのばか……」

そう叫びながら部屋から飛び出してしまった。

「姉さん……」

お見舞い・生徒会ルート編・その一

楯無、本音、虚の三人は四五六のお見舞いに来た。

「四五六君大丈夫かしら……」

「愛しのごろーちゃんが心配？」

「そうよって本音!!」

「怒った」

そんな風に話しながら四五六の部屋に到着し、ノックする。

「かんちゃん、いる？四五六君のお見舞いに来ただけど」

「ね、姉さん!？ちよ、ま……」

簪の返事も聞かずに入った部屋の中で見たものは

「……」  
「ピキッ」

「かんちゃんやる」

「これはこれは」

簪が自分のベットのなかで四五六を抱きしめているところだった。

「かんちゃん、どういう事かな？これは……」

口調こそ穏やかだが目が笑っていない楯無。

「ピュ〜ピュ〜かんちゃんやる」



冷やかす本音。

「不潔です……」

そう言いながらも顔を少し赤くしながら言う虚。

「これは理由が有るの!!」

必死に説明をする簪。

「そう、四五六くんがね……」

一通りの説明を簪から聞き、考え込む楯無。

「ごろーちゃん、どんな夢見たんだろう」

心配そうにする本音。

「悪夢ですか……」

楯無と同じく考え込む虚。

「よし決めた。私も四五六君と一緒に寝るわ」

「……え？姉さん？」

「かんちゃんと私の2人一緒なら四五六君だって悪夢を見ないはず」

有言実行と言わんばかりにベットに入り込む楯無。

「なら、空気を読める本音はクールに去るぜ」

口元を袖で隠しにこやかに笑いながら部屋から出て行く本音。

「……IS学園の寮は完全防音せいとなっております。それとしばらくの間この部屋に人が近づかないように手配します」

頬を赤く染めそんな事を言い放つ楯無。

「本音!?!虚!?!」

「さあ、一緒に添い寝しましょう!?!」

その16 (前書き)

甘さ控えめ(笑)

## その16

ただいま絶賛ピンチの四五六です。何がピンチだった？……俺の目の色が簪さんにばれました。

風邪を引いて気が緩んでいたせいでついっかかり黒のカラーコンタクトを外したまま浴槽から部屋の中に戻ってしまい、そこを簪さんに見られました。どうしよう？

「四五六君、その目って……」

「いや、そのこれは……」

どうやって説明しよう？まさか中二臭い姿が嫌だから変装してました、なんて言えないからな。

「……別に四五六君が言いたくなかったら言わなくても良いよ？」

「……あ、そう言っただけだと助かります」

ふう。どうやら深くは追求してこないようだ。助かった。

「その、簪さん。この事は他の人には秘密にしてもらえますか？」

「秘密に？」

「ええ。俺、あんまりこの目の色って好きじゃないんですよ。だからあまり人に知られたくないっていうか……」

「分かった。この事は私の中にしまっておくね」

「……………ありがとうございます」

よかった。どうやら秘密にしてくれるようだ。……………目の色が嫌い  
って言うのは本当だよ？まあ、今の自分の名前と似合わないって言  
うだけけど。

「それじゃあ、俺はもう一眠りっ！！」

そそくさと自分のベットに戻ろうとした時、急に足から力が抜け  
て崩れるように床に跪く。

「四五六君！？」

簪さんが駆け寄ってくる。

「だ、大丈夫です。ちょっと気が抜けたようで」

「無理しないで。まだ治ってないんだから。」

ベットまで肩を貸してくれる。

「っと。……………すみません簪さん。迷惑掛けます」

「ううん。気にしないで。私がしたいからしてるんだから」

「そう、ですか……………でもっ」

其処まで言った直後、俺のお腹から大きな音が。

「……」

「……」

顔が赤くなるのがよく分かる。

「……何か作ってくるね」

「……すみません」

消えるような声で呟く。ベットにもぐりこみ掛け布団で顔を隠し  
恥ずかしがる。

(女性に腹の音を聞かれるとか、恥ずかしすぎる!!)

しばらくの間、ベットの中で悶えているとなにやらしい香りが。

「出来たよ、四五六君」

簪さんが作ってくれたのは卵粥だった。

「これぐらいしか出来なかったけど、いいかな」

「大丈夫だよ……美味しそう」

早速食べようとしてスプーンを持とうとしたら何故か簪さんが持  
ち、そのままお粥を掬い

「四五六君、あーんして？」

と、してきた。

「か、簪さん！？何をっ」

「？」

「いや、そんな不思議そうな顔をされても……」

アレか！更識家ではこれがデフォルトなのか！？

「あーん、して」

ちよつと不機嫌っぽくなった簪さんに気押されてそのまま一口食べる。

「……どう、かな？美味しい？」

「……塩が効きすぎてる、ご飯を茹で過ぎ、卵が硬すぎ」

「あう……」

「でも、俺が今まで食べてきた中で一番美味しいよ。ありがとう、簪さん」

素直な感想と共に笑顔で答えたら、顔を真っ赤にして小さくあうあう言いながらもスプーンでお粥を食べさせてくれる。

「ご馳走様でした」

「……お粗末様でした」

お腹が減っていたのかすぐに食べ終えてしまいそのまま横になり目を瞑る。

「……ねえ、簪さん」

「何？四五六君」

「病氣の時に、誰かがいてくれるって幸せだね」

「……え？」

俺の言葉に動きが止まる簪さん。

「俺の家ってさ。両親が共働きしてて小さい頃から家で一人きりだったんだよ。だから、平日とかに風邪とか引くと家に一人つきりだったから、こうやって誰かに付きっ切りで看病してくれることって初めてでさ」

「……」

実は俺と両親は仲が悪い。いや悪いつて言うよりお互いにどう接していいか分からない、って言うほうが正しいのかな。

俺は銀髪に赤と青のオツドアイなのに、両親共に黒髪黒目なのだ。まあ両親の親族には結構な数の外国人の血が混ざっているらしいので隔世遺伝とか言う奴でたまたま俺の髪と目の色がこうなった、とはお互い分かつてはいるものの、やっぱり自分達と違う髪と目の色



を持って生まれてきた俺に対して何処か拒絶するところがあったの  
だろう。

さらに、俺は前世の記憶があるおかげで幼少の時から無駄に落ち  
着いていたせいもあり、両親の俺を見る目には怯えがあった。

「だから、今日は本当にありがとう」

目を見つめ、素直に感謝の言葉を話す。

「……………ううん。これぐらいならいつでもしてあげる。だから私が病  
気になったら付きっ切りで看病してくれる？」

「もちろん」

そう返事をし、お互いに笑い合う。

その16 (後書き)

積みゲーをする。小説も書く。どちらもこなさいといけないのが小説家の辛いところだ(笑)

嘘みたいだろ。これってIS(バトル物)の二次小説なんだぜ？

## その17 (前書き)

ストーリーを先に進めるか、それともイチャイチャ続けるか、どっちにしよう？

## その17

先日、遂に簪さんにオッドアイがばれた四五六です。

オッドアイがばれた後、簪さんから追求される事も無くいたって普通に接してくれたのがとてもありがたかったです。

さて、俺自身の風邪も昨日で完全に治り、今日は朝から感謝の気持ちを含めて簪さんと、楯無さんのお弁当を作りました。で、それを2人に渡し、教室に向かおうとした所を織斑先生に捕まり、何故か職員室近くの生徒指導室につれてこられました。

「……あの、織斑先生？俺、何かしましたか」

「いや、別に説教をするために読んだのではない。ただ先日あった襲撃事件の事でちょっとな……」

「はあ……」

何か嫌な予感がするなあ。まさかばれてないよな？

「本当は次の日にでもすぐにしたかったのだが、一二三が風邪を引いてしまったので今日まで延びたわけだ」

「それは、すみません」

「謝るな。病気では仕方が無いだろう……まあ、何で風邪を引くような事になったかは後で聞くとして、一二三。襲撃事件の時、貴様は何所にいた？」

「襲撃事件の時、ですか……」

「そうだ」

「えっと、あの日はアリーナの外にいました」

「アリーナの外に？」

「はい。俺、人ごみの中って嫌いなんですよ。それに周りが女性だけって言うのもきつくて……だから試合を見るだけなら外からでもモニターで見れるから外にいました」

「……それは間違いないな」

「はい」

織斑先生にまっすぐに見つめられて、目を逸らさないように見つめる。此処で目を逸らしたらとてもまずい事になる。そう俺の厄介事センサーが告げている。

「そう、か。ならいい」

「……あの、何でそんな事を聞きに？」

「あの襲撃してきた機体の目的が一夏のISコアの奪取だったとはいえ男性適合者が襲われたのは事実。でだ、もう一人の男性適合者、つまり一二三貴様が今後襲われない、という事はありえない。この事で今後貴様は学校行事などの祭事の際には出来るだけ人目の着く場所、もしくは教員などの近くに要るように、と上の方から言われ

てな」

「はあ」

「まあ、こんな事は言いたくは無いが一二三。貴様はたった二人しか居ない男性適合者だ。その2人にもしもの事が有ったらIS学園の面目は丸つぶれだ。だから今後少し不自由かもしれないがなるべく人目につくようしろ」

「……そうですか。分かりました」

「すまん。こんな事はしたくないのだが」

「いえ、俺自身がどういう立場なのかは分かってるつもりですから」

「そう、か……一夏も一二三のように自分の立場を理解してくれればいいのだが、ハア……」

憂鬱な表情でため息をつき少し頭を下げる織斑先生。

「ため息すると運が逃げますよ？」

「ため息もしたくなる。あの馬鹿は……」

その後、何故か織斑先生の一夏に対する愚痴を聞くはめになった。まあ殆どが愚痴と言うか弟自慢だったが。……このブラコンが！！

「今、何か私に対して不名誉な事思わなかったか」

「い、いえ何も」

恐いよ、織斑先生。

「っと、話がそれたな。それでだ、一二三。貴様に専用機を持たせようという動きがある。」

「専用機、ですか」

「そうだ。まあ、すぐに作る、と言っわけではないが近い内に本格的にそういう話が出るはずだ」

「専用機か。うん」

「どうした？」

「別に専用機じゃなくてもラファール・リヴァイヴを一機貸してくれるだけで良いんですけどね」

「どうしてだ？自分の専用機が欲しくないのか」

少し不思議そうにたずねる織斑先生。

「一夏の専用機を見てるとちょっと……」

「……あれは別物と考える」

ちよつと引きつった顔をする織斑先生。でも俺に専用機は要らないんだよな。もう“持ってるし”

「まだしばらく先の話だ。一応考えておけ」

「はい」

「という話がありました」

「そっか、四五六君にも専用機をね」

お昼時、秘密の場所で楯無さんと食事中、今朝あったことを話してみる。

「俺としては他の専用機のように何か特殊な装備とかは要らないからラファール・リヴァイヴ見たいに沢山の火器を使用できる機体で十分なんですよ」

特殊兵装なんて「八卦球」でおなか一杯です。

「そうかしら？特殊装備っていいじゃない」

「……それで一夏見たいな物を付けられてもね」

「ああ」

共に苦笑いをする。

「っとそっいえば、楯無さん」



「なに？四五六君」

「この前はお見舞い、ありがとうございます」

頭を下げる。

「いいのよ別に。私がしたくてしたんだから。それに四五六君にはお世話になってるんだから」

そういつて俺が作ったお弁当を持ち上げる楯無さん。

「まあ、それでも一応は」

「律儀ね」

「性分ですから」

その後は他愛も無い話をして解散となった。

「……四五六君の専用機、ね」

「専用機？四五六君に？」

「そう。この前の襲撃事件のせいで自衛が出来るようになって」

一日の授業が終わり自室で簪さんと話をする。

「……四五六君は2人しかいない男性適合者だもんね」

「そうなんだけど……専用機か」

「欲しくないの？」

「正直、専用機貰うくらいならラファール・リヴァイヴ借りたいです」

「何でラファール・リヴァイヴなの？量産機より専用機のほうが性能は良いよ」

「性能はよくても、どこぞのマッドな科学者が作った試作兵器が積まれたような専用機が来るような気がして嫌なんだよね。ほら、一夏見たいに」

「ああ」

苦笑いをする簪さん。

「まあ、まだ先の話しだしどうなるかは分からないけどね」

「そうだね……そうだ、四五六君」

「なに簪さん？」

ちよつと頬を染めもじもじし始める簪さん。

「その、ね……その、私に料理、教えてくれないかな？」

「料理を？」

「うん。私もその、四五六君みたいに料理作れるようになりたいから」

「そつか。分かった。俺でよければ教えるよ」

「ありがとう、四五六君」

俺が教える、と言ったら笑顔になる簪さん。花が咲く笑顔、とはこの事を言うのかな？

「じゃあ、明日からで良いかな」

「うん。お願いします」

「俺は結構スパルタだよ。ついて来られるかな？」

「……お手柔らかにね」

## その17（後書き）

さて、次回の話は四五六と簪が料理の食材を買いに出かける、と言う名目のデートにするか、それともさっさと話を進めてシャル&ラウラを出すか。

てか、最近気が付いたんだけど四五六とラウラって見た目が被ってる気がする。どちらも銀髪でオッドアイとか。

おまけ

食事の最後、別れる前に楯無さんに話しかけられる。

「そっだ四五六君」

「はい？何ですか」

「ないとは思っけど……風邪引いてる時かんちゃんに何かしなかったわよね？」

目を細め聞いて来る楯無さん。

「いやいやいや、風邪引いてるのに何をしろと？」

「ほら、動けないから体を拭いてとか、手が動かないから食べさせてとかしてないわよね」

「ハッハッハ、してな……あ」

「あ？」

「……それでは失礼します」

後ろを向き全速力で走り去る。風になれ俺！！

「な、ちよつと待ちなさい！！かんちゃんに何したの！！」

その後、授業開始時間まで恐怖の鬼ごっこが続いた。

「かんちゃんに何をした……………！！！！！」

## その18 (前書き)

前話にて誤字で、ブラコンと書こうとしたところをシスコン、と書いてしまったのを指摘されて閃いてしまった、新規ルート。

心機一転、一夏ヒロインルート

織斑一夏が何故アレほどまでに鈍感なのかが明かされるルート

条件 NTRルート、誰得！？一夏ルートのグラフィックを100%にすること。

## その18

先日、簪さんからのお願いで料理を教える事になった四五六です。

料理を教える事はいいのですが、あいにく食材があまり無かったので休日に一緒に買いに出かける事にしました。その事をついっかり楯無さんに話してしまい、殺されかけたのは別の話し。

さて、当日になったのですが簪さんとは10時に駅前集合、という事でしたのでただいま駅前に向かっております。

「さて、と。こちら辺だったはずんだけど……」

駅前で簪さんを探してあたりを見回すと、いました。少し離れた所の噴水の前にいました。

「おー……」

声を掛けようとしたとき簪さんが此方に振り向き、その姿を見た俺はつい声が止まってしまいました。

なぜならその姿はとても可愛く、綺麗だったからです。ああ、言葉で上手く表せれない自分の語彙のしょぼさが悲しすぎる。

その姿を確認した後、自分の姿を見ました。顔はいつも通りに黒髪黒目黒縁メガネで服装は、一言で言えば地味、それ以外に言い表せない格好でした。

これはまずい。このまま簪さんの前に行ったらいろいろな意味でまずい気がする。すぐさま其処を離れ簪さんに電話をしました。

「あ、簪さん」

「どうしたの？四五六君」

「もう待ち合わせの場所についちゃってるかな」

「うん。もうついてるけど」

ちなみに今の時間は9時30分です。

「そっか。悪いけどもうちょっとだけ待っててもらえるかな。時間には間に合わせるから」

「分かった。大丈夫だよ。時間より速く着いちゃったのは私のほうだし」

「ごめんなさい。すぐ行くから」

「うん。待ってる」

そうして携帯を切りすぐさま近くの服屋に入り込み、すぐさま新しい服を買いました。店員に似合うの？貴方みたいな人に、的な目で見られましたが気にせずに着室を借りてそこでメガネを外し、カラーコンタクトを取り、色落しのスプレーで髪の色を銀色に戻し、今しがた買ったこの服に着替え、試着室をでます。

出たところでいかにも似合わない服装を笑ってやろうとしていた店員と出くわしましたが、店員は出てきた俺を見て呆然とした表情になってました。ざまあー！！



服屋を出て簪さんが待っている噴水のところまで向かっていると、簪さんが複数の男性にナンパされてました。……ビキィ！！

「ねえねえ、良いだろう？俺たちと一緒にさ遊びに行こうぜ」

「そうそう。待ち合わせなんかほっといてさ」

「……結構です」

「そう言わないでさ」

簪さんが嫌がっているのに手を掴もうとしたその手を掴む。

「其処までにして貰おうか。彼女は俺の待ち合わせの人なんでな」

「な！テメエなに、さま……」

男達が見たのは銀髪に赤と青のオッドアイのとてもカッコいい男性でした。男から見ても美しいといえるほどの……

「簪さん、遅れてごめんね？」

「え、あ、うん」

「彼女は俺と待ち合わせしてたんだ。離れてもらえるかな」

「す、すみませんでした」

「すみません」

慌てて離れていく男達。

「ごめんね。遅れたせいで不快な目に合わせちゃって」

「う、ううん。気にしてない、けど……四五六君なの？」

「そっだよ」

「嘘……」

簪さんはとても驚いた表情だった。

「あゝ似合わなかったかなこの格好」

「ち、ちが！！その……とってもかっこいいです」

最後の方は顔を赤く染め呟く様に話す簪さん。

「そっか。よかった。じゃあ、行くっか」

そっいつて手を差し出す。

「え？」

「今日は人が多いからはぐれないようにね」

「……う、うん」

おずおずと手を取り繋ぐ二人。

「さあ、行くっ」

「うん!!」

「此処は、映画館？食材買いに来たんじゃないの四五六君」

「そう思ってただけど、今から買っちゃうと後が大変だから此処で時間を潰そうと思ったんだけど、ダメだったかな？」

「ううん、大丈夫だよ」

「そっか……なら何見ようか」

今この映画館で上映されているのは、「戦場で紡ぐ愛 敵兵とのラブストーリー」「ザ・サラリーマン2 再就職先はブラック企業!?!」「歴代ヒーロー大集結!!!これがヒーロー魂だ!!!」の三本だった。

「どれがいいかな？簪さんはどれが……」

簪さんの方を向いて見たらヒーロー物に釘付けだった。

「簪さん？」

「へう!?!な、何かな」

「どれ見ようか？」

「え、えっと……じゃあ、その戦場で紡ぐ愛、で」

「分かった。店員さん「歴代ヒーロー大集結！！これがヒーロー魂だ！！」、を大人二枚で」

「かしこまりました」

「四五六君！？」

「あんなに凝視してちゃあバレバレだよ」

「うう……」

顔を赤くしそっぽを向く簪さん。

「じゃあ、行こう」

「……うん」

「歴代ヒーロー大集結！！これがヒーロー魂だ！！」はタイトル通り、今日までに放映された戦隊ヒーローが集結し映画版の巨大な敵組織を打ち破る、と言う王道パターンだったけど隣で見ている簪さんは目をキラキラさせながら時折体や手を動かして見ている。

「楽しかったね！！四五六君」

「そうだね。手や体が動くくらいだったもんね？簪さんは」

「な！そ、そんな事してないもん」

また顔を赤くして否定する簪さん。

「ハハ、じゃあそういう事にしておこうかな」

「し、四五六君！！」

ポカポカと軽く胸を叩いて抗議している簪さんは可愛かった。

「っと、こんな時間か、お昼にしようか？」

「もうこんな時間なんだ」

気が付けばお昼を回った時間だった。

「何処か行きたい場所ってある？」

「……じゃあ、あそこで」

そうして連れて行かれた場所は大手チェーン店のファミレスだった。

「……ハッ、い、いらっしやませ」

店員さんが何故か呆けていたが気にしない。

「2人で」

「かしこまりました。此方にどうぞ」

案内された場所にすわり注文を終えたあと簪さんに話しかけられる。

「あの、四五六君」

「なに？」

「その髪の毛の色も、もしかして……」

「ああそうだよ。この髪の色と目の色が俺の本当の色だよ。驚いたでしょ」

「う、うん。ビックリしちゃった」

「本当は今日もいつも通りの黒髪黒目の地味な格好で来ようとしたんだけど」

其処まで話してちよつと微笑む。

「簪さんの姿を見たらちよつとね……」

「えっと、変だった？」

「いや、可愛すぎてね」

「か、かわっ！！」

真っ赤になる簪さん。最近真っ赤になる頻度が多くないか？

「可愛い簪さんと一緒に出かけるなら俺もそれ相当の格好しないと  
って思ってたね」

「うう……」

ますます赤くなる簪さん。可愛いな、ホント。

「そ、そういえば映画楽しかったね」

いかにも話題を逸らそうと話しかける簪さん。

「うん。映画だとやっぱり一味違うよね」

「そうそう。テレビで見るのもいいけど大きなスクリーンで見るの  
は格別だよね」

しばらく話して、話が途切れた時、こっぴど聞かれた。

「四五六君、その、女の子がこっぴどやってヒーロー物の話をするって  
変、じゃないかな」

「？、どうして」

「だって、その、クラスの女子の話とか聞いてるとヒーロー物とか  
じゃなくて可愛いもの話や最近の芸能人の話とかしてて私、つい  
ていけなくて」

「……」

「いつも一人で整備とかしてて、その傍らにテレビでヒーロー物ばかり見てて、私って女の子らしくないのかな」

さっきまでの楽しげな表情から急に悲しげな顔になる簪さん。

「……いいんじゃないかな、それでも」

「…え？」

「たとえヒーロー物が好きでもいいと思うよ俺は」

「でも……」

「それに、女の子らしくないって言うけど俺から見たら簪さんは十分に可愛い女の子だよ」

「……」

俺の話聞いて目を潤ませ、赤くなる簪さん。

「か、簪さん！？なにが俺悪い事言ったかな」

「うっん、違うの。その嬉しくって」

「簪さん……」

その後、簪さんが落ち着いたら後注文した料理が来て二人で楽しく話しながら食べてお店をあとにする。

「それでは、今日の目的の食材選びに行こうか」



「うん……四五六君、その……」

おずおずとしながら俺の手を見つめる簪さん。

「ああ」

簪さんと手を繋ぐ俺。

「じゃあ行こうか」

「……うん……」

食材の選び方を教えながら一緒に買い物をし、夕方になり学園に戻る事に。

「四五六君、今日はありがとう」

「どうしたの急に?」

「その、今日は私のためにいろいろしてくれたから……」

「ああ、気にしなくていいよ。俺がしたかったからしただけだから」

「それでも、だよ。本当にありがとう」

その時の簪さんの笑顔は夕日と相まって本当に綺麗だった。

「……だからこれはお礼だよ」

「え？」

簪さんが近づいてきたと思ったら俺の頬にキスをされた。

「……フフ、私先に帰ってるね」

「……」

呆然とする俺に、イタズラが成功したような顔をしながら先に帰っていく簪さん。

「……まいったな、これは」

突然の不意打ちに呆然とするも全く嫌な気持ちは無く、むしろとても心地よい気持ちになった。

「惚れちゃった、かな」

## その18 (後書き)

そろそろストーリーを進めるよ。

部屋割りのアンケートをとりたいと思います。

- 1 そのまま
- 2 ラウラと
- 3 シャルと
- 4 一夏と

さてどれが良いですかね？シャル&ラウラは一緒になってもヒロイン化はしませんよ。2人は一夏に押し付ける予定なので

ただ、餌付けはされますがww

期限は、このあと裏5とその19を書き終えるまでです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8610y/>

---

IS 転生して貰ったのは！？

2011年12月12日00時10分発行